

---

# 現代召喚者のススメ　～あの一、アクマ出てきたんですけど～

通神？

---



## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現代召喚者のススメ　　あー、アクマ出てきたんですけど

### 【Nコード】

N6837L

### 【作者名】

通神？

### 【あらすじ】

八月五日午前一時十三分十二秒。

一般人にとっては何の変哲のないこの時間は、僕たち - 鯨井芹、鈴川萌、狂火菰の三人にとって人生を変える一瞬になった。

” 思い出作り ” の為に作ったずさんな魔法陣から現れた五人の少女。突然の事態に驚きを隠せない僕ら - （一人を除く）は、何とか元の世界に帰ってもらおうと……え？ 帰れない？ ……は？ しかもそれは僕らのせい？

そしてしまいには、自分たちと” 契約 ” して世界中に散らばった7



2人の悪魔を封印しろだって!?



## キャラ紹介（ネタバレ注意）（前書き）

初めての投稿です。

パソコンに不慣れなのでとんでもないミスをするかもしれませんが、  
温かく見守ってくれると幸いです。



## キャラ紹介（ネタバレ注意）

キャラクター紹介（ネタバレ注意）

鯨井芹 くじらいせり 黒茶髪、丸っこい瞳、童顔。両親が世界を渡り歩く有名な考古学者で、歴史と家事が得意なこと以外は普通だと言い張る。高校一年。一人称は「僕」

鈴川萌 すずかわきよす 黒髪黒瞳、知的メガネ、長身（180センチ強）。文武両道 ハイスベック という高性能の持ち主だが、夢である”非現実を自分の手で引き起こす”ことに一心不乱なせいでいつも突拍子もないことをする。高校一年。一人称は「俺」

狂火菰 くるわいぼも 濃紺髪、切れ長な瞳、小柄な体型。三年前に起こった事件により自分の意志とは正反対の嘘しかつけなくなってしまう、二人と芹の幼馴染の齊 なすな 以外とはコミュニケーションが取れない為、いつも傍観者の立ち位置にいる。高校一年。一人称は「俺」

徳之沢齊 とくのさわなすな 栗髪茶瞳、健康的な体躯。芹の幼馴染で世話役。見た目とは裏腹（？）な家事スキルを持っており、彼の両親から世話を頼まれている（しかし、今現在芹の方が実力は上）。高校一年。一人称は「私」

アンドロマリウス 紅髪、勝気な瞳、ポニーテール。召喚された悪魔の一人（？）で委員長みたいな性格。自分を呼ぶ時には相手に『マリー』と呼ぶことを強要する。



ダンタリオン 黒紫髪、妖艶な顔つき、お姉さま体型。召喚された悪魔の一人（？）で見た目と違わぬ性格。最初に『あらあら』と言うのが口癖。

セエレ 白銀髪碧眼、華奢な体躯。召喚された悪魔の一人（？）で大人しい性格。が、自分が地味だと言われるとキレる。

ヴァサゴ 黄髪黄瞳、おこちゃま体型。召喚された悪魔の一人（？）で天真爛漫な性格。それ故人にデマカセを言うこともしばしば。

プルフランス 銀髪銀瞳、人形のような表情。召喚された悪魔の一人（？）で無口無表情。しかし、精神年齢は少々幼い。



## キャラ紹介（ネタバレ注意）（後書き）

補足ですが、菰くんのセリフはルビが「本当に言いたいこと」で、セリフが「言っていること」になりますのでご注意ください。



## ブログ・七月二十九日（前書き）

前回の投稿から随分と経ってしまつて、大変ご迷惑をおかけしました。

しかし、何とかこれで本編に入れそうです。  
最初は芹くん編から。



## プロローグ - 七月二十九日

八月五日午前一時十三分十二秒。

人類にとつては何の変哲のなく過ぎていくハズだったこの時間は、  
僕ら　鯨井芹くじらいせり、鈴川萌すずかわもえ、狂火菰くるいびまこの三人にとつて、全てを変える一瞬へと変貌を遂げた。

纏わりつくような風、光る魔法陣、

そして、悪魔と呼ばれる者との邂逅。

全て嘘だと信じたかった。

「さて、貴方達ね。私達を呼んだのは」

ふいに声をかけられ、弾かれるように振り向くと、そこには紅髪の少女がこつちを見ていた。多分、僕らに向かつて言ったのだらうけど、何故だかそれがどこか遠い世界のように思えてならない。

いや、そう思いたいだけなんだ。

しかし、こつちが黙っている間にも彼女はゆっくりと近付いてくる。その先は　僕？

「……そう、黙っているならそれでもいいわ。でも、ここにいる以上、貴方達に訊くしかないの」

数十秒という時間を労し、僕の目の前にやって来た少女は、その白魚のような指をゆっくりと僕の顎へ這わせながら、真紅の瞳に妖艶さを孕ませてこう言った。

「だから訊くわ。　貴方達の望みは何かしら」

そんな現実から逃げるように、僕は全ての始まりであろうあの日  
七月二十九日のことを思い出していた。

「サークルを作る？」

七月二十九日　数少ない夏休みの登校日に、このクラス……いや、この学校で一番の変人であろう悪友　鈴川萌の一言を僕は一



文字変わらず復唱した。

「　って一体どういうことなんだ？」

ワックスでツンツンに固めた黒髪が目立つ一八〇センチ強の長身男性は、黒縁の知的メガネをくいつ、と中指で押し上げ、顎を支えて『考えています』のポーズを取りながら応えた。

「ん？　それは言葉の意味が分からない、と解釈してもいいかね？」

「妙に偉そうだな……、それ以外にどう解釈できるんだよ？」

「スペルはcircle。意味は円、仲間、活動としての範囲」

「……この屁理屈っ！」

僕の嫌味を、不敵な笑みとともに切り返す萌。いつものやり取りだけど、やっぱり腹が立つ。

この男、見た目もいいし運動も勉強もできる、いわゆる、文武両道ハイスベックの高性能な人間なのだが、繰り出す行動や言動が全て突拍子のないことが災いしてその才能を全く生かせてない。要するに、何をやらしてもとんでもない方向へと飛んで行ってしまふのだ。それで被害を受けるのはいつも僕達なので勘弁してほしい限りだ。

本当にこいつは僕の悪友なのか不安に

「まあ、そんな事はどうでも良くて」

「そんな事って……」

「そんなモンだろ、お前なんて」

「……とりあえず、出口はあっちだよ」

「はっはっは、そっちは窓だぞバカ野郎」

「あっはっは、早く飛べってんだよこの野郎」

「今日も僕は仲良しだ。」

「全然、良くないぞ（ちよつといいか？）」

朗らかな笑顔で互いに友情を確認しあっていたら、ふいに背後から声をかけられた。振り返ると、そこには短く切り揃えられた濃紺の髪に切れ長な瞳が特徴的な、小柄な少年の姿が。

「おう菰、いつからいたんだ？」

「……ついさっき。気付いてたぞ（ずっと前から。気付かなかった



のか？」

「はは、わりわり」

萌の台詞に、やや細めの双眸をさらに眇める少年。

彼 狂火菰はちよつと影が薄い。とある事件であまり話さないのと、自ら進んで目立たない所にしようとすることも重なってか、少し目を離すと見失ってしまうほど地味なのだ。

「全然、つまらなそうだな（ちよつと、面白そうだな）」

「おつ、お前もそう思うか？」

「いや（ああ）」

噂をすれば、僕に代わって菰が萌と会話をしているのが見えた。

この会話、傍から見れば全く会話が成り立ってないように見えるが、実は二人の間ではきちんろ成立している。

なぜなら菰は 嘘つきだからだ。

それも生半可な嘘つきじゃない。言ったこと全て（………）が、無意識に意志とは正反対の言葉となって出てくるのだ。そのせいで、僕達としかコミュニケーションが取れないのが。

けど、それはものすごい正直者だと僕は思う。例えるなら、千回のうち三回だけ（……）本当のことを言う『せんみつ』よりも、百パーセント嘘しか（……）言わない『天邪鬼』の方が信用できるようなものだから。

なので、一見否定しているように見える菰の台詞は、このイベントに賛成の意思をしめしているらしい。何のことが良く分からないけど、一度否定しておかなくては。

「それでお前、自分の宿題やるか？ 芹」

「やらないよ」

「そうか……、じゃ、俺の分よろしく（ぽん）」

「分かったよ。それならやってお つかい！」

僕は、萌の宿題のテキストを思いつきり地面に叩きつけた。教室



が少し静かになった。

「おおノリツツコミ。 お前に教えることはもうないな」

「免許皆伝しても嬉しくないわい」

「まあ、それはいいとして」

「拾えよ」

「お前の方が拾えよ。 お前が叩きつけたんだろっが」

「貴様が渡したのが元凶だろうがっ！」

全く……、と言いながら渋々といった感じでテキストを拾う萌。  
何が全くだ何が。

「……で、どうすんだ？ 本当に」

「……へ？」

「『へ？』って、何も聞いてなかったろ、お前」  
「う……」

図星を突かれて言葉に詰まる。すると萌は嘆息しながら、腰に両手をあてて、

「よし、そんな鯨井君の為に、この鈴川さんが分かりやすく教えてしんぜよう」

「なんで上から目線なんだよ」

「ぶっちやけて簡単に言っと、お前はサークル作りの雑用係決定、きやは という事だ」

「恐ろしいまでに傍若無人だなお前は！？ そもそも何をするのかも」

「あ、先生来ねえじゃん。 何にもないなら帰ろおっと」

「人の話を聞けよっ！！」

やばい。こいつの変人ぶりにエンジンがかかり始めやがった。早く話<sup>ケリ</sup>に決着<sup>ケリ</sup>をつけないと、あの口癖<sup>クヘツ</sup>が出てきてしまう。

「……で？」

「『で？』とはどういう意味かね」

「その『サークルを作る』ってどういうことだよ」

「言葉のまんまだが？」



「具体的に！」

とりあえず、ここが分からなきゃ文字通り話にならない。  
すると突然、萌は人差し指をピンと立てた。

「さて、ここでクエスチョンです鯨井君」

「……………は？」

「一般的にサークルとは、何を目的に作られるでしょう？」

「……………意味不明　はっ！」

しまった！？　あまりにも話の流れが理解不能だったから、もうこの口癖が口から零れてしまった。うう、あまり言いたくなかったのに……………。

「出たな、意味不明。今日は早かったなー」

「うう、貴様のせいだ……………」

「いやー、それほどでも」

「褒めてないわ！」

こうやって遊ばれるから。今度こそ絶対に治そ

「ほら、早く答え給え」

「……………何かを呼び寄せるため、だろ？」

「正解。緑のパネルが飛び込んで、赤のパネルがはい消えた！」

「意味不明、　っ！　はあ……………」

うと決心した途端に口を突いて出てしまう。何このイジメ？

「　にしてもよく一発で分かったな」

「……………知らない（分かる）」

「お前とどれだけつるんでたと思ってんだよ」

「……………まあ、それにお前ら俺の夢知ってるもんな」

「世の中の“非現実”に遭遇すること、だっけ？」

「おかしくない。初めて聞いた（変だな。何度聞いても）」

そう、こいつがこんなにも変わっているのは、一概にこの夢の影響が大きい。ってかそれが原因だ。小学校の低学年の頃から“非現実”となるものを追い求めていたらしい。幽霊に始まり、白魔術、黒魔術、UMAまで色々な物を試してきたという。一体この男のど



これからそんな情熱が湧いてくるのか不思議でしようがない。

「……で、今度は何と呼び出すんだ？ UFOか？」

「そんなありきたりなモノ、当の昔にやったわ」

「やったんかい。」

「じゃあ一体何さ」

「これだよ」

そう言つて悪友が出してきたのは、一枚のコピー用紙。どうやらインターネットのサイトをコピーしたらしく、不可思議な模様の円陣に、説明文らしきものが目がチカチカしそうなほどビッチリ書かれている。

「……………何、こ」

「何よこれ？」

あ……、という僕の声とともに、横から何者かが紙と台詞を掠め盗つていった。

「今度は何をやらかすつもり？ あんたたち」

紙が持つてかれた方向を見ると、そこには栗色の髪で細身だけど健康的な体軀をした少女が、つまらなそうにそれを眺めながら、そう呟いていた。

「なんだ、誰かと思えばただの薺か」

「『ただの』って何よ。一応あんたの幼馴染よ、芹」

少女 徳之沢薺は、紙から視線を外すと僕に標準を定めてそう言い返してきた。確かに小さい頃からの仲だけど。小・中・高と同じ学校だけど。

「おやおや、お決まり（テンプレート）な台詞とともに登場とは、よっ、お熱いねっ」

「はいはい、あんたも毎回毎回同じ台詞をありがとね、萌」

そんな事を考えていると、萌と薺の軽口の叩き合いが始まっていた。参ったな、これが始まると話が進まなくなるんだよねあ……。長いし。

「で、これで一体何と呼び出すのさ？」



僕はこの騒音未満喧騒以上の争いを止めるべく、二人の間に割り込む。すると、萌は再び某クイズ番組のような口調で語り始めた。

「では、再びクエスチョンです」

「何で世界ふ　ぎ発見風!？」

薺、言いたいのは分かるが、こいつにツッコんだらキリがないぞ。奴はスリも驚愕の手癖の悪さで僕からあの紙をひつたくと、近くの机に力強く叩きつけた。妙に長ったらしい説明文と幾何学的なグラフィックを一瞥した後、視線を戻す。

「鯨井君、『ソロモン七十二柱』というものをご存じかね？」

おい、クイズ調じゃないんかい。

「これぐらいなら分かるだろ。何だって有名な考古学者の息子だからな」

「……その言い方止めろ、って言ってるだろ」

はは、わりわり、と苦笑いしながらも目で答えを促す悪友。

「……確か昔、ソロモンっていう王様が従えた七十二人の従者、だっけ？」

「イスラエルよ、イスラエル」

「正解。スーパーひ　し君げーっと」

「あつてる（ちがうだろ）」

僕に質問していたハズなのに、気付けば薺と菰も話に参加していた。

「確かそれって、従者じゃなくって、悪魔じゃなかった？」

「え？　そうなの？」

「そうだが？」

「結構有名よ。知らなかったの？」

「へえ……。物知りだね、薺は」

やっぱりそういうオカルト的なものって、女の子の方が詳しいのかな？

「な、なな何言ってるの!?　これくらい常識よ!　そんな当たり前前の事褒められたって嬉しくないわよっ!」



……何て思ってたなら、速攻で否定された。何もそんな顔を真つ赤にするほど怒らなくても……。そして、隣にいる萌が『このナチュラルテンプレートが……』って呪詛のように呟いてるのが異様に怖い。

「そ、そんなのが一体この紙と何の関係……が」

その頃は、思いもよらなかったんだ。

「召<sup>よ</sup>ぶんだよ。……こいつらをな!!」

それが、全てを変える言葉になるなんて。



## プロローグ・七月二十九日（後書き）

……異様に長くなってしまいました。プロローグのくせに。

このような感じのものがもうしばらく続くので、ご了承ください。

（何の注意報？）



全ての始まり・・・七月二十五日（前書き）

今度は萌くん視点から書いた物語です。

また、過去モノログですが。彼がこんな変人になった経緯（？）を懸命に書いてみました。



## 全ての始まり - 七月二十五日

八月五日午前一時十三分十二秒。

七十二を適当に入れて導き出したこの瞬間が過ぎ、今日の前に起きている光景に俺　鈴川萌は大いに歓喜していた。

夢にまで見た“非現実”との遭遇。すぐにでも諸手を挙げて喜ぶたい所だが、今回はそうも言ってられない。

……いや、心境はもう『きゃっほう』という感じなのだが、本当は　心の奥底では、こんな事しなければ良かったとも感じている。

別に後悔をしているワケじゃない。

ただ、

「こんな所で何やってんのよ？　萌」

七月二十五日。

外の暑さが嘘みたいと感じられるほど肌寒い、スーパーの野菜売り場。

右手に真っ赤なトマト、左手に濃い紫色のナスを持ったまま頭を捻っている俺の耳に、遠くから一人の女性の声が響き渡った。

振り返ってみると、そこにはふんわりとした栗髪を揺らす一人の少女の姿。

「……誰かと思って振り向いてみれば、ただの齊くんじゃないか」

「『ただの』って何よ、『ただの』って」

声の主　徳之沢齊は、俺の軽口に応えながらこちらに近付いてきた。

「『ただの』じゃないとすると、もしや君はスーパー齊くんなのかね!？」

「誰がとんちのきいた事を言えと言ったのよ!」

俺の台詞にいちいち突っかかってくる齊。彼女の反応を見ている



と、段々面白くなつてきて軽口が止まらなくなるから不思議だ。

「はっはっは、冗談だよ、冗談。英語で言うとマイケルジョーダン」  
「……………」

むう、どうやら俺の渾身のギャグはウケなかったようだ。まあ、常人には理解できないものがあるからしょうがないが。

「あんたのセンスには、どんな変人でもついてこれないと思うわ……」

この俺の思考を若干でも読んだ彼女は、読心術の才能があるのか  
もしれない。

「で、本当に何しに来たのよ。こんな所に」  
薺はそう言つと、俺が両手に持つてる野菜をしげしげと眺め。

「……これ、毒とか入ってないわよねえ？」  
「失礼な。れっきとした無農薬だ」

そう言つてしまうそれを、ホントかしら、と訝しみの視線を送り  
続けていた。彼女は本当に俺を何だと思っているのだろうか。

まあ、どうでもいいが。

「そういう君はどうしたのかね？」

「見れば分かるでしょう？」

「見て分らんから訊いてるのではないか。全く、これだからゆとりは……」

「あんたもでしょうが！」

「まあ、俺も芹に振る舞う料理の買い出し、としか分らんな」

「わ、分かつてんならさつさと言いなさいよっ！」

ぜえぜえと息を切らしながらも、ボケをツッコミ倒す彼女。やはり  
楽しい。流石はあいつ直伝のツッコミだ。

言い忘れていたが、彼女は俺の悪友 芹の幼少期からの幼馴染  
だ。彼曰く、幼稚園の頃からの腐れ縁らしく、小・中と同じ学校で、  
高校も同じになったのが災いして、入学と同時に長期出張が決まっ  
た彼の両親が息子の世話役として頼んだせいで、ちよつとばかり煩  
わしいくらいに家にやって来るといふ。確かに少しばかり性格に難



がないワケではないが、彼女の家事スキルは称賛に値する。それを『鬱陶しい』というあいつの気持ち、俺には理解できん。つくづく羨ましい男だ。

ちなみに、今日俺がここにいるのは、何を隠そう俺自身の夢の為である。

“非現実”との遭遇。

もつと言え、それらを自らの手で引き起こす事。

それが誇りであり、プライドのような俺の夢だ。

きつかけは、何の変哲のないものからだ。ほんの些細な好奇心と、小さな体験から俺の夢は始まった。最初の頃は実家の近くの墓地で一晩中座って、幽霊を待っていたり、中学のころには白黒両方の魔術を試したり、誰もいない学校に忍び込んで奇怪な円陣をライオン引きで作ってみたりした。

けれど現実には そんなに上手くいかなかった。

一晩中待っても幽霊は来なかったし、魔術なんてただの嘘八百。サークルなんて作っても何も来ないどころか、見回りに見つかって大目玉を食らうだけだった。

……あまりの現実の柔軟性のなさを恨んだりもした。『現代は小説よりも奇なり』と言った奴の顔をぶん殴りたくなった。周りにバカにされ、時には蔑まれる度に荒れた。

そんなある時、一度だけ本気で夢を諦めそうになったことがある。

理由は何て事はない。ただガラの悪い連中に、暇つぶしにボコボコにされただけだ。けど、当時の俺は心身ともにボロボロで、色んなものが折れかかっていた。



そんな時、公園のベンチに座ってた一人の老人にこう言われた。

「自分が見つけた道なら、何があってもその道をバカみたいに突き進んでみる。さすればいづれ、その道を理解してくれる者がきつと現れる」

何でそんな事が分かるんだよ、と訊き返すと、その老人は自信満々に答えた。

世の中はそういうものだ、と。

なので俺は、今は一人じゃない。俺には芹と菰がいる。  
夢を理解し、共に分かち合ってくれる友がいる。

「……………崩？　おい、聞いているの？」

「……………」

「もう、しつかりしなさいっ！」

「おぶていんっ！」

一体何を手に入れたのよ！　という声と頭に迸る激痛に我に返ると、右手を手刀にした薺が目に入ってきた。どうやら俺はトリップでもしていたらしい。

「痛いな、全く。俺は壊れたテレビじゃないんだぞ」

「もともと頭が壊れてるようなもんだから、丁度いいんじゃない？  
ひどい言われようだ。」

「で、本当の本当に何しに来たの？　まさか“非現実”とか言うやつじゃないわよね？」

「良く分かったな。えらいえらい」

「そんな事で褒められても嬉しくないわよ」

見事に俺の目的を見抜いた薺に、満面の笑みで応える。



そう、今日ここに来たのは他でもない。今回挑戦する“非現実”に必要なものを調達する為だ。

ソロモン七十二柱。

古代イスラエルの王　ソロモンが従えていた、特殊な能力を持つ七十二人の悪魔。現代に伝わっている有名な悪魔達だ。世の中には『おとぎ話の産物だ』というリアルストもいるが、具体的な能力に加えて七十二という中途半端な数が、俺の中の好奇心をくすぐって仕方がない。

因みに食材は、召喚の儀式に必要なので買い出しに来たのだ。そんな事言っても彼女には分からないだろうが。

「まあいいわ。それより芹の家でご飯食べてく？」

「おっ、いいのか？」

一瞬、ウチのニユアンスが違ったような気がするが、気にしない。「どうせ、誘わなくても行くつもりだったんでしょ芹の家に？　しかも長く」

「バレたか」

「それなら一人前多く作っても、大して変わらないから食べてほしいわ」

「そうか、……羨ましいぞ芹い。こんな気の利く彼女がいるなんてよお」

「な……っ！　なな、何ふざけた事言ってるのよバカっ！」

「ぎがていんっ！」

顔を真っ赤にしながらかお決まり（テンプレート）な台詞と攻撃をモロに喰らわせてくる齎をからかいながら、こんな時間が永遠に続けばと祈っていた。

そんな二人を巻き込んでしまった罪悪感が、頭にこびりついて離れない。



全ての始まり・・・七月二十五日（後書き）

やっぱり彼は変人ですね（笑）

次回は菰くんが体験した、とある出来事をお送りします。  
お楽しみに



兆し - 八月二日（前書き）

投稿が遅かったり早かったり、不安定な作者ですいません。  
今回は菰くんが主役の話です。ちょぴつとホラーじみたところがあり  
ますが、楽しみながら読んで頂ければ幸いです。



兆し――八月二日

全てが思い出の彼方に消えていけばいいのに……。

八月五日午前一時十三分十二秒。

その一瞬は、俺　狂火菰の淡い願望をあつさりと打ち砕いていた。

続いて、心の奥底から後悔の念が湧きあがってくる。

それは、この現象の全ての原因であろう日　八月二日に遡る。

「今日まで待ったんだ。返事を聞かせて貰おうか、芹」

「……………はあ」

学校から一駅離れた、小都会のファミレスの一角。

俺と萌は、先日話していた例の件の返答を芹から聞くためにここまでやって来た。本来ならこういう話は、海外に出張していて現在一人暮らしの芹の家で行う方が都合がいいのだが、今回は少し勝手が違うらしい。萌曰く『芹の考えは<sup>あいっ</sup>当に読めているからな。物事とは常に先に先に行動するものだよ、菰っち』だそうだ。典型的な日本人体質の芹がどういう返事を出すなんて、俺でも容易に予想できるのだが。

「……………、分かった。僕もやるよ。菰はともかく、お前は目を離すと何するか分からないからな。萌」

案の定、予想通りの返事を確認した俺は、窓からぼんやりと外の景観を眺め始めた。俺の役割は、あくまでも芹の同意を証明するための参考人。それ以上の事は聞いてない。何の気兼ねもなくのんびり出来そうだ。

俺は、人間が大嫌いだ。

人は、何かと言って『数字』というものにこだわる。



そう思ってしまったのは、三年前のとある事件が原因だったりする所もあるのだが、それを差し引いても、人間という存在にあまり好意というものが持てないのでいる。

数字しか追い求めない人。アスファルトの道で懸命にティッシュを配る女性、汗を拭きながらその横を通り過ぎる小太りなサラリーマン。みんな利益という名の『数字』しか見ていない。数字、数字、数字。それがいくら世の中の真理だとしても、気に食わない。ロクに“人間”を見ている者なんてほとんど存在しない。

だから俺は“嘘つき”になった。この狭い世界で、“人間”を見てくれる人に出会うために……。

「おお、い、菰。聞いてるか？」

窓の外を見ながら物思いにふけっていると、ふいにそんな台詞が俺の鼓膜を大いに揺らした。弾かれるようにその方向に視線を向けると、そこにはさっきまで話していた萌。そして、その相手をしていた芹の丸っこい瞳まで、こちらを捉えているのが見えた。

「……あ、ああ（い、いや）」

咄嗟に口を突いて出てきた言葉は、俺の意志とは正反対の言葉を紡ぐ。

「やっぱりな、そうだと思っただぜ」

「仕方ないよ。菰は傍観者なんだろ？ お前が言うには」

案の定と言わんばかりの態度の萌を芹がなだめ、さっきまで話していた事を復唱し始めた。

今日ここに来た目的は 場所を探す事だという。

萌曰く、今度行う召喚の儀式には大きく開けた場所が必要らしく、そういう場所を見つけるにこの辺り好都合なのだという。確かに駅の周辺は建設中のビルも多く、少し都市部から離れた住宅街の近くには自然も多い。ほとんど最適に近い。

なのでこの辺りを散策することにした（独断で）らしいのだが、『以前、肝試しに行った廃ビルはどうだろうか』という芹の意見に萌が『あそこは建設予定地になっってるからもう使えないし、あそ



こじや雰囲気出ないだろうがボケエ』と反論したところから、諍いが始まってしまったという。……………何か、話が段々とズレてきているのは気のせいかな？

「 思い出したらまた腹が立ってきた」

「俺もだ」

「そもそもお前のカンはアテにならないんだよ！ この間だって『近所の前田さん家にUFOが出る』って大嘘こいて、大目玉喰らったのもう忘れたのかよ！？」

「うるせえ！ あの時黒魔術の順序を間違えたただけだ」

「間違えたも何も、それらしいものは出なかったじゃないか！」

「ってかそれ以前に、あそこでお前がこけたからいけないんだろっが」

「お前が足を引つ掛けて『囧大 作 戦』とかほざくからだろ！」

「だからって俺達まで巻き込むか普通！？」

「うるさいこのツンツン頭！ どっかの幻想でもブチ殺してろ」

「黙れこの童顔！ お子様ランチでも頼んで食ってろ」

「なにおう、お前なんか」

「決まらないなら、のらくら帰るか？（決まったんなら、さっさと行くぞ）」

二人の口論が白熱しそうになりそうな所で、割り込むようにピシヤリと言い放つ。

萌は物事の発案者なのはいいが、物事を独断で決めつけすぎだ。今回は俺もその案に賛成だったから何も言わなかったけど、もう少し周りの意見を参照するべきだと思う。そして芹、お前は決まったことをとやかく口を挟まない方がいい。諍いの元になるだけだ。

そんなような内容を二人に伝え、席を立ち上がると、さっきまで言い争ってた二人も後に続いて店舗を出た。いつもの事だ。萌が発案し、芹がそれを改善して、最後に俺が客観的にまとめる。それが俺



達のスタイルなのだ。

今回は範囲が広いという事で、各自別行動という形で周辺の探索活動を始める事にした。

萌が駅周辺の都市部、芹が少し離れた住宅部、そして俺は町外れの自然区域の探索担当に割り振られた。基本的に芹達以外の人間とはあまり会話が成り立たない俺は、他人と会話する機会のある所には出来るだけ行きたくなかったし、俺自身、一人になる時間が欲しかったので御厚意に甘えて、町外れの探索に向かった。

見慣れた景色を眺めながら、再び思考に戻る。

今まで当たり前のように話していたが、俺が“嘘つき”である事に気付いたのは、あの二人が初めてだった（薺は芹に教えられて知ったらしいが）。とある事件でこうする事に決めてから三年間、蔑まれ、馬鹿にされてきた俺にとって、初めてできた理解者だ。唯一無二と言ってもいい。彼らがいるから俺はこの世の中に『存在』を見出せる。誰に何と言われようと、俺は彼らがいるだけで十分なのだ。

芹と萌がいるから、俺は俺としていられるのだから……。

「……………」

不意に我に返り、足を止めると、俺の目の前には見覚えのない光景が映っていた。

森。

そうとしか形容のしようがない。右を左を上を下を前を後ろを見ても深緑に彩られた木々や青々とした雑草が鬱蒼と生い茂っている。

……………いや、下以外は、だ。

俺の真下。そう、今現在自分が立っているこの場所だけが一本の草が生えていないのだ。

あまりにも出来過ぎた偶然。全身に寒気が迸る。



何だ、この異常なまでの寒気は？  
沈黙。

「……………何だよ（おい）」

重すぎる空気に耐えきれなくなって、つい口から言葉が漏れて静寂を打ち破るが、数秒もしない内に再び重たい空気が静寂と共に沈んでゆく。

次の瞬間　。

突風。

それも、図ったかのようなタイミングで。

「　っ！」

ヤバイ。  
何故だか知らないが、俺の中の本能が頭の警鐘を鳴らす。ここから早く立ち去れと、体を急かす。

しかし、体が全く動かない。脳の命令を受け付けてくれない。  
永遠にも等しい数秒が、静寂に流れてゆく……。

その硬直から俺を解放してくれたのは、意外にも近くから響く音だった。

電子音。

持っている携帯電話の音声か。静寂をかき消し、俺はようやく縛られていた体の自由を取り戻す。この音は着信音なので液晶画面を覗くと、そこには鈴川萌の文字が。

応答ボタンを押す。

『もしもし』

「……………誰だ？（きざすか）」

随分と軽い声音で応答する悪友。何かあったのだろうか？



『どうだ？ いい場所見つけたか？』

「……………俺は（そっちは？）」

『ダメだ、俺も芹の方も全くアテのないまま帰ってきた』

「……………納得できない（そうか）」

これは珍しい。これまでアイツらとつるんできて、一度だって全身“非現実”レーダーを張っているあの萌が、何も見つけれなかったなんて事はなかったのに。

『ところでそっちはどうだ、菰？』

「い、いや（あ、ああ）俺は……………」

ここを話したらどうだろうか？

一瞬だけ、そんな考えが脳裏を横切る。

いや、何を考えているんだ俺は？ 何かが変だ。全てが都合よく進んでる気がする。トントントン拍子に話が進み過ぎている気がする。

……………このまま言っちゃダメだ。

「……………俺は……………」

何とかして正直に言わ（嘘をつか）なくては。  
なんて考えていると。

『5……………4……………3……………』

「？」

不意に、俺の鼓膜に向かって謎のカウントダウンが展開されていた。一体何なのだろう？ なんて思っても、謎のカウントダウンは一向に止まらず。

『3……………2……………1……………0！ さあ、その場所を吐け つ！』

「……………は？」

いつもの茶れ目つけな声が、その真意を教えてくれた。

『今お前は何かを見つけている。しかし、とある事情で話せない。そうだろう？』

どこからそんな根拠が出てくるんだ、と訊くと。

『ん？ 何だ？ 何か違っているのか？』

すると、萌は不思議そうに訊ね返してきた。ここで正直に答えれ



（嘘をつけ）ばいいのだが。

「あ、ああ（い、いや）」

嘘しかつけない（正直者な）自分が、少しだけ恨めしい。

『じゃあ、後で場所をメールしておいてくれ。それと、もう遅いから（・・・・・・）俺達は先に帰るわ』

「え？」

じゃ、と着信が切れるのを合図に周りを見渡すと、さっきまで青かった空は、うつすらと茜色に染まり始めていた。

慌てて携帯の液晶画面を見ると、五時三十分というリアルな時間が表示されていた。確か俺が芹達と別れたのが二時頃だったハズだから、実質四時間ここにいた事になる。

・・・・・・まるで狐につままれた気分、俺は最早呆然とするしかなかった。

＊

夕闇に染まり始める閑静な住宅街。

俺は一人、メールを打ちながら帰路についていた。

俺は嘘つきだ。

しかし、それは“話すこと”だけに限定されており、メールや手紙など“文章”を媒体にすると、俺は自分の意志をそのまま反映することができる。なので、俺が情報を伝えなきゃいけない事があると、こうやってメールで伝える事が多くなる。

「・・・・さて、これじゃダメだな（よし、これでいいかな？）」

長い時間をかけてようやく打ち終わった文章を見て、思わず一人呟く。あとは、これを芹と萌に送れば。

・・・・・・ちよつと待て？



何故、俺はこんなにもあつさり物事を理解しているんだ？

何故、俺はこんなメールを作ったんだ？

何故、俺は     あの場所を教えようとしているんだ？

「     ッ!？」

気が付けば、俺の手が勝手に動いてるような気がする。まるで吸い込まれていくように親指が送信ボタンを押そうとしている（・・・）。

ま、マズ     、と本能が感じた時には     。

……………携帯の液晶画面にこんな文字が表記されていた。

『送信しました』

どこかで、言っておくべきだったんだ。  
何かがおかしい、と。



兆し - 八月二日（後書き）

個人的に、菰くんが一番のお気に入りだったりします。  
でも一番書くのが大変なのも彼（笑）。

……まあ、手間のかかる子ほど可愛いっていいますし。

……え？ それよりも早く悪魔出せって？ 女性キャラ増やせって？

- - すいません。しばらくは齋さんで我慢してくださいっ！



## 召喚 - 八月五日深夜（前書き）

投稿日を見てみたら、規則正しく毎日出しているのに気付き、キャラの名前に大きな間違いをしていることに気付きました。ルビもきちんと打ててないし……。

死んでしまえばいいのに……。自分。



## 召喚 - 八月五日深夜

八月五日午前零時三十三分。

暗闇という物質で形成された空間を懐中電灯で切り裂きながら、三人の少年　鯨井芹、鈴川萌、狂火菰はとある森の中を突き進んでいた。肩には重量感のあるリュックサック、両手にはレジ袋を抱え、閉ざされた道なき道行く三人。

「おー、見つけたぞ」

先陣を切っていた萌は長い茂みのゲートを抜けると、真っ先にそんな声を洩らした。続いて芹、菰が荒地を知覚。ぞんざいにリュックを降ろし母なる大地に鎮座する。

「はあ、やつと着いたよ」

「……………<sup>おも</sup>軽かった」

全く情けないぞ、という萌の台詞を二人は無視。バリバリ運動系の部活の連中並みの体力の持ち主と、放課後を帰宅に捧げてきた自分達を比較するのが根本的に間違っているんだと言わんばかりに。

「……………まあ、お疲れさん」

すると、彼らの心の声が届いたのか、一人元気な萌が労いの言葉をかける。

芹の肩を叩きながら　。

「一番重い　火鉢を運んでくれてよ」

「騙したなあっ！」

潮風が似合いそうな爽やかな笑顔を、止めの台詞と共に。

八月五日午前零時四十六分。

萌を中心に、奇々怪々な模様が描かれた円陣を作り始めて数分後に、その張本人　萌は芹を呼びつけた。

「一体どうしたのさ？」

一人黙々と作業を続ける菰を視界の隅に置きながら、彼の許に寄



る芹。こんな時に呼び出されるのは口クでもないモノであることはすでに身に染みるほど思い知らされている彼にとって、この呼び出しはあまりいい気分ではない。

「君に重大任務を授けようと思う」

それでもこの予感が杞憂であつてくれと願つたが、やはり彼にとつては頭痛のタネにしかならないような台詞に、図らずとも眉間に青筋が立ってしまう。この男に常識を理解させることは出来ないと思うと、悲しみが込み上げてくる芹今日この頃。

「……………何？」

しかし、ここで黄昏ていても仕方ないので答えを促すと、案の定、奇怪な返事が返ってきた。

「呪文」

「は？」

「呪文だよ。じゅ・も・ん」

「……………意味不明なんだけど」

いくらスタッカートで強調しようと、理解できなければ意味はない。あまり使いたくない口癖を言いながら先を促すと、萌は続けた。彼が言うには、儀式の最後の総仕上げとして、現世との扉を開く為の“鍵”として、呪文は重要な価値を持つのだという。

「だったら菰にやらせればいいじゃないか。どうして僕が…………」

それでも尚関わりたくない芹は、何とか責任転嫁を図る。しかし、そんな彼に萌はこう返す。

「あのなあお前、俺が菰に内緒でお前に相談した意味分かつてんのか？ 菰はあまり他人とコミュニケーションが取れないからこういうのには関わらせたくないし、それで失敗して責任を押し付けるのも心が痛むだろ？」

「まあ…………」

こいつも一応人の事考えてんだなあ、と感慨深いものを感じた芹は。

「だからお前に頼んでるんだよ、芹。な？」



「……………そういう事ならしょうがないね」

じゃあ萌おまえがやればいいんじゃないか、という当たり前の事に気付かなかった。

八月五日午前零時五十二分。

地面にあの幾何学的な円陣が出来上がると、計画発案者の萌は自分達がつけてきたリュックやビニール袋の中をまさぐり出した。

「な、何をやってるのさ？」

火鉢を持ってきた芹は、自分以外の持ってきた荷物が気になって思わず訊ねた。彼らが軽い物を持ってきてたなら迷わず、グーで殴るつもりで。

しかし、彼が取り出したのは、果物や魚介類など、冷凍生物関係なく揃えられた食材だった。乱雑に入れられた所に家事が趣味の芹は一瞬憤慨しそうになったが、保存方法が良かった事が幸いし、少し溜飲が下がる。

「召喚儀式というのは、召喚する側がわざわざ異界の住人を呼び出すんだ」

「要するに、“貢物”ってこと？」

まあ、そういう事になるな、と萌は一息つけ、続ける。

「悪魔の中にも属性つてものがあるらしくてな。マーキュリーヴィーナス 水星、金星、月、ジュピター 木星、土星と言つ風にな」

「にして今回は？」

「全部だ」

「うん、そんな事を訊いた僕がバカだった」

予想通りの反応に思わず溜息を洩らす芹を、萌は無視。火鉢を菰と協力して円陣の中心に運び、火をおこし、食材をくべる。

淡い白色の煙がゆらゆらとライトの届かない漆黒の夜空に漂い、火鉢の周辺は、白いヴェールに覆われたような神秘的な空間へと変わっていた。

そこで、異変は起きた。



一瞬。

ほんの一瞬だけ、彼らの作り上げた魔法陣が仄かに光を放った。

「あれ……？」

そう思った芹と菰は、ほぼ同時に声をあげ、互いを見る。

「……………今の、見た？」

「いや（ああ）」

「何だろうね…………？」

「…………分かる（わからない）」

二人が困惑してる間にも、時は流れていく。

八月五日午前一時三分。

「いよいよ十分切ったぞ」

と無駄に張りきる長身の少年      萌を尻目に、小柄の少年      菰

は、一人である事を考えていた。

三日前に起こったあの出来事。あんな事があつたからなのか、十分前に起こった現象に一抹の不安を拭えないでいる。

メールを送った後、嫌だと言い切れないまま今日この時まで来てしまった。

出来る事なら、ここで起きる事全てを思い出の彼方に消えてほしい。それが彼が持っている数少ない願望の一つだ。

しかし、この儚い思いさえ自分のせいで消えてしまいかもしれない。

出来る事なら、何も起こらないでくれ…………っ！

彼が祈っている間にも、時は流れ。

そして、あの瞬間が訪れる。

\*

八月五日午前一時十分。

眠気眼をこすりながら僕      鯨井芹は、答えのない難題に頭を捻っていた。



悩みの種は勿論あの男が出した“呪文”を唱えるという単純明快複雑怪奇なシロモノ。何にも考えず、脊髄の赴くままに作った言葉の羅列をテキストに話せばそれで済む話なのだが、相手は変人の権化と噂されるほどの変人。生半可なことを言えばコンマ数秒でツツコミが返ってくることは必至。何とも扱い辛い男だと今になって思う。

「本当、どうし」

「おおーい、そろそろ決まったかあ？」

噂をすれば何とやら（確か影にさす……だったような気がする）、僕の気など全く感じない鈍感変人が無駄にやなタイミングで話しかけてきた。

「……はあ」

「何だよ、その俺が来ちゃいけない、みたいな空気は。昼寝はちゃんとしてきたんだろ？」

そんな話、初めて聞いたが。

「何で昼寝の話になるんだよ……」

こんな変人じゃなければ、顔もそこそこなのに……、とちよっと現実逃避。

「……で、決めたか？ 呪文」

「……はあ」

「おいおい、頼むよ。ここにきて考えてないとか言うなよ」

案の定、この男には現実逃避を許してはくれず、僕の返事を求める視線を送ってくる。

再び嘆息が漏れる。

「いや、あることはある」

知らないといいんだけど。

「おう何だ、言ってみろ」

当然のようにそれを促され、僕は人差し指をピンと立て、右手を天に、左を地面に向け。

「エ イムエツ イム。我は求め訴えたり」



「悪くんかつ！ 悪魔んなのかつ！？」

「むう、良く分かったな。お前の親の世代のアニメだぞ？」

「そんな所で寝められても嬉しくないわボケエ」

的中したくなかった予想が的中し、ダメ出しされて、逃げ場がなくなってきた。

「芹、萌」

すると、蚊帳の外の菰に背後から話しかけられ、助かった思いながら魔法陣の前に立つ。

時刻は八月五日午前一時十二分四十秒を回った。

「いよいよだな」

「いや（ああ）」

「本番であんなの止めてくれよ。お前のジジくさいネタには付き合っ  
てられねえからな」

「それって言っちゃいけないんじゃない？……？」

ほら、やっぱり菰がワケ分かんない、という顔してるし。  
そして十三分になったその瞬間。

再び仄かに光り始める魔法陣。

「え……っ、また」

「五……四……三」

突然起こった現象を訝しむ時間も無く、カウントダウンが始まった。  
これやっぱり絶対におか。

「……二……一」

ってそうじゃないっ！ 何か言わないと……っ！

「0、今だっ……！」

「げ、元気ですかああああああっ……！」

「……」



[illegible]

「おい、あれほどジジくせえネタは止めろって言っただろぅがあああああ！！！」

やってもうた  
つ！

コンマ数秒前の羞恥ともう終わった暗度に、思わず溜息をつこうとした瞬間。

「はあ、い」  
「………っ！？」

不意に、そんな声が聞えてきた。

具体的には、年頃の女性がA B 4 8 の1・5倍の音量と種類のさらに、水面に重たいものが入る音。

瞬間、火鉢が沈んだ。

文字通り、魔法陣の中に。

見ると、魔法陣の中が揺れている。本当に水面が出来てる……？  
まるで夢でも見ているみた。

『この言語は日本語でしょうか？』

「あらあら、今回は日本人のようみたいね」

「でもでも、この国が無宗教じゃなかったっけ？」

サタニスト  
悪魔崇拝者

『ほらほら、そんな事言っていないでさっさと出るわよ』

「せえ、っの！！」

ポンっ、と。まるでアニメのびっくり箱を開けたような音が聞えると同時に、一陣の風とまばゆい光が駆け抜け、視界が真っ白に塗りつぶされていく……。



やがて世界が色を取り戻すとそこには、いるハズのないヒトが、いた。

それが、午前一時十三分十二秒の事だった。



## 召喚 - 八月五日深夜（後書き）

やっとこさ召喚までこぎつけました。

次回もなるべく早く出せるように頑張りますのでよろしく願います。



## 鍵 - 五日深夜（前書き）

随分と時間が空いてしまったような気がします（今回はわりと本気で）。

自分でもびつくりするほどの駄文ですが、生温かい目で見守ってくれば幸いです。

今回でやっと時間が前に進みました。さあこれから三人はどうなるのでしょうか？

是非ご覧ください



## 鍵 - 五日深夜

それは、一人の少女だった。

燃えるようなワインレッドのポニーテールに、勝気な瞳。見た目は僕達と同じ十六・七あたりで、若干齎と同じ雰囲気を漂わせている。

彼女の名前はアンドロマリウス。そう名乗っていた。

それは、一人の女性だった。

どこかの結晶のような黒紫こくしの髪に、妖艶さを孕ませた容姿。見た目は二十くらいで、カジュアルな服装がより一層妖艶の色を濃くしている。

彼女の名前はダンタリオン。そう名乗って微笑んだ。

それは一人の少女だった。

向日葵のようなライトイエローの短髪に、あどけなさを残す顔立ち。見た目は十いくかいかないうくらいで、ポケットが多い機能的なジャケットがどこか新聞記者ジャーナリストを彷彿とさせてくれる。

彼女の名前はヴァサゴ。そう元気に名乗っていた。

それは一人の少女だった。

雪のような純白の髪のプロカットに華奢な体躯。見た目は十四・五と僕達より少し下で、セーラー服の白さが逆に彼女の色白さを引き出している。

彼女の名前はセエレ。伏目がちにそう名乗ってくれた。

それは一人の少女だった。

刃物のような白銀の髪に、機械のような無表情。見た目は十二・三あたりで、全身黒色のゴスロリを着ているので、一瞬人形なのか



と錯覚させる。

彼女の名前はプルプラス。たったそれだけ名乗った。

「さて、貴方達ね。私達を呼んだのは」

吹きすさぶ一陣の風に紅髪を揺らしながら、アンドロマリウスと名乗る少女はこちらを見た。その双眸は、髪と同じくワインレッドをしている。

そんな光景を目の前にして僕は、思考が停止しかけていた。

「……そう、黙っていたいならそれでもいいわ」

違います。あまりの光景に言葉が出ないだけです。

「でも、ここにいます以上、貴方達に訊くしかないの」

僕が心の中でそんな事を考えてる間にも、彼女はこっちに近づいてくる。その先は 僕？

「だから訊くわ」

そして、その彼女が数秒後に僕の顎に指を這わせている事を知覚。すぐくすぐったいし、何かいけない事してるような錯覚がする。

「貴方達の望みは何かしら？」

僕はそんな現実から逃避する為に、過去の出来事を思い出しにく。えーつと……。

サークルを作ろうと言いだした 場所を探索してここを見つけた  
そしてここに良く分らない円陣を作って声をかけた 召喚成功

……………つまり、諸悪の根源は 。

「いいなー芹、一人だけアバンちえるのぶっ！」

崩だあああああつ！！

そう思ってから僕の行動は早く、隣で羨ましそうな声を出していた悪友を上段回し蹴りで吹き飛ばした。

崩は全く防御行動を取れなかったらしく空中で見事に二回転したあと、地面に熱烈キッス。ふん、人をバカにするからこうなるんだ。



あいつが起き上がる前に、罵倒の言葉をかけようとした瞬間。

「だ　　っ！　人の話を聞きなさ

　　いっ！！」

「へ？」

背後から、何か吹っ切れた声が轟いた。

振り返るとそこには、さっきとはうって変わって顔を真っ赤にした少女の姿が。てか至近距離で騒がれたから耳痛い。

「あらあら、やっぱり切れてしまいましたか」

「確かに私が悪かったわよ……。柄に合わないことだと自分でも分かってたわよ」

彼女の隣にいたダンタリオンと名乗る女性が案の定と言わんばかりに苦笑し、同じく隣にいたセエレと名乗っていた少女が怯えている間にも、アンドロマリウスの言葉は止まらない。

「あつはつは、マリーちゃんがおかんむりだー」

「ええっ！　そんなのんびりと構えてていいの！？」

「おーすごいな芹、悪魔とのファーストコンタクトに成功だ」

「嬉しくないわっ！」

気が付けば遠くから朗らかに笑っているヴァサゴと名乗った幼女と、変人地球代表の板挟み。怯えているセエレと無表情のプルfras、固まっている菰だけが心の支えだ。

「　あんた達、覚悟出来てるんでしょうね？」

「あ、あのう、謝った方が……」

「……………怒ると怖い」

どうしようか困っていたら、その二人からアドバイスを頂いた。それもそうだ、とりあえずこの場を治めていただかないと。

他の二人とアイコンタクト、心を一つにしたところで。

「「はい、自分達が悪かったです」」「いいえ、自分達は悪くないです」」



「どっちなのよ!」

あ、嘘つき(まこも)のこと忘れてた。

閑話休題。

「要するにあんた達は“思い出作り”の為に、ソロモン七十二柱<sup>たち</sup>を呼んだと、そう言いたいよね?」

「「はい、そうです(いいえ、そうではありません)」「」  
「ふざけんじやないわよ」

今にも切れそうだった彼女を何とかして落ち着け、今置かれている状況を懸命に説明したところ、返ってきた言葉がこれだった。結構傷つく。

「まあ、俺は呼び出す気マンマンだったけどな」

「お前は黙ってる話がややこしくなるから。折角穩便に帰ってもらおうと思って」

「おいお前今何て言った?『帰す』って言いやがふうっ!」

僕の拳が萌<sup>むすめ</sup>の顔<sup>おもて</sup>にクリティカルヒットした。

「帰る」

「そうしていただけると、「ありがた(くな)いんですが」「  
って菰も喋らないで! 混乱するから!」

「……悪くない(わるい)」

結局、何の意味も無く呼び出された事が分かった彼女達は、くると踵を返して魔法陣の中に帰ろうとした。

が。

「……………帰れない」

耳に響いてきた言葉に、僕は耳を疑った。

「あらあら、扉<sup>ゲート</sup>に魔力の反応が全くみられないわね」



「それじゃあ、魔力を込めたら戻れるんじゃない？」

「そうね、ちよつとやってみますわ」

しかし、呆然とする僕らに対して、突然の事態に冷静な悪魔たち。光を失った魔法陣に向かつて両手をかざし、そこから溢れる光を魔法陣に送る。どうやら原因が分かったようだ。良かったよか。

「……………え？」

ったと思った瞬間、魔法陣に送った光がバチィツと音をたてて、空気中に霧散した。

静まり返る荒地。

尋常じゃなく重たい空気。

「……………えーっと、一体何が」

「魔力が弾かれたってことは……………」

「……………もう一つの可能性を考慮する必要がある」

話しかけようとした僕を無視しながらも、話し合いは続く。

というか『もう一つの可能性』って……………？

「でもそんな事が有り得るの？ 高位の魔術師じゃない上に、『召喚の書』や『鎖骨の書』もない。こんなただのガキが起こしたって

グリモア

レメゲトン

いうの？」

「あらあら、それを見る（・・・）のが貴女 능력じゃないのかしら

？」

「……………仕方ないわね」

しばらくして会合が終わったのか、アンドロマリウスがこっちを見ると、何かを紡ぎ始めた。

「『正邪の瞳は世界を見抜く』」

刹那、変化が起きた。

彼女のワインレッドの瞳が、文字通り混じりけのない真紅に染まり始めた。

思わず吸い寄せられそうな双眸に半ば呆然とする僕ら。



しばらくすると、その瞳は元のワインレッドに戻り、ここにいる全員に聞えるような声で。

「やっぱり、こいつらが原因よ」

衝撃の台詞を言い放った。

「小さな方が三つ、大きな方が一つ。これだけあれば十分よ」

「あら、それで誰が持つてるの？」

「全員よ。大きな方は 分らない。一つあるのは確かなんだけど、どいつが持つてるまでは把握できないわ」

「……………あのー、何のことかさっぱり分らないんですけど」

話が一段落ついた所で、割り込むように会話に介入すると、彼女はこちらを向いて僕を指差してこう言った。

「簡潔に言わせてもらっわ。元の世界に帰れなくなったの。他でもない、あんた達のせい（……………）でね」

頭の中が真っ白になった。

\*

「悪魔の偽王国？」

しばしのシヨックから立ち直り、彼女達が仰った現象名を、僕はそっくりそのまま復唱した。

「そ。それがあんた達が引き起こし、私達を召喚することに成功した原因よ」

ふと顔を上げると、そこには仁王立ちでこっちを見下ろす紅髪の少女。

悪魔の偽王国。

何ともファンタスティックな現象名だ。

まあ、それはそれとして。

「あのー、どうして僕らは正座させられてるんでしょう？」



とりあえず今、僕達は下が荒地にも関わらず強制的に正座させられている。砂利が膝に当たって地味に痛いんですけど……。

「それはあんた達が他人の話を聞かないからじゃない！」

「……………注意力散漫」

一蹴。しかも酷い言われようだ。注意力散漫って小学生じゃあるま。

「おい早く続きを説明しろよ。あとで小説のネタにするがふうっ！」

僕は、瞳をまるでダイヤのように輝かせる萌を殴り倒した。

「すいませんでした」

「分かればよろしい」

閑話休題。

「で、その現象は一体どういうことですか？」

本当ならそんな厨二設定聞きたくもないのだが、今回はもうそんな目に遭っているのでツツコまない。むしろツツコんでられない。

「随分と素直ね？」

「本当は信じたくないんですけど……………」

でなきゃこんな所から逃げてます。

僕そう言つと、彼女は紅髪を揺らしながら語り始めた。

悪魔の偽王国というのは、詰まる所『悪魔と人間の勝負』なのだそうだ。

とある“鍵”が中心となり召喚を行う事によって呼びされたソロモン七十二柱は、元の世界から半ば強制的に弾き出され、この現象が終わるまで戻ることができないらしい。

勝負の決着条件は二つ。

一つは、“鍵”を持つ人間が全ての悪魔を『封印』すること。  
もう一つは。

彼女達が、世界を無に帰すこと。

「……………」

とりあえず、頭が痛くなってきた。



「来・た・よ・超展開　っ！！」

隣で物凄くはしゃいでる萌の脳ミソが少しかだけ羨ましい。

「え、えーっと、もし……、もしその話が本当だとしたら、その原因って誰の責任に？」

「あんた達全員よ。当たり前じゃない」

冗談だ、と言われるのを期待していたがあっさりと裏切られた拳句、現実を見せつけられる。

「な、何を根拠に」

「そりゃあ、あんた達の中に“鍵”があつたからよ。悪魔の偽王国は“鍵”がなければ基本的に起きないんだから」

「……………あ、あのう、その“鍵”って一体何ですか？」

僕はさつきから気になってた単語について訊ねる。もう色んな事を諦めかけてきた。

「……………あんた、『ソロモンの大きな鍵、小さな鍵』って知ってるかしら？」

聞いたことがある、確かソロモン王が従えていた七十二人の従者について書かれていた本だったような気がする。

「こつちの世界ではあれは魔導書って呼ばれる代物なんだけど、私達の世界では違っていて、それらは五十もの“能力”を持つ　唯<sup>わ</sup>一悪魔と“契約”して、その力を引き出すことができる人間の事よ。  
たしたち　小さな方が四十七本、大きな方が三本。

つまりあんた達は、これが始まった時から悪魔の偽王国から  
このたたかい逃れられない特別な人間ってわけ」

意識を放棄したくなった。

「ちよっと待てよ」

すると、さつきまではしゃいでいたハズの萌が話に割り込んできた。

「思ったんだがよお、それって　」  
奴はそこで一息つけ。



「それって、“鍵”である俺達は、ソロモン七十二柱であるあんたらと“契約”しなくちゃいけないんじゃないか？」

僕は全力で意識を放棄したくなった。



## 鍵 - 五日深夜（後書き）

突然ですが、

悪魔の偽王国のルビの案を募集します。

それまではノールビでいくのでよろしくお願いします。



契約・五日深夜（前書き）

ツンデレって何ですか？ ヤンデレって何ですか？

どうしてそんな自分がラブコメなんか始めてしまったのだろうか？

もう、何にもわかりません。

気が付いたらこんな文を書いていたんです。

温かく見守ってくれと幸いです。



## 契約 - 五日深夜

つまるところ、僕達は彼女達と“契約”することになった。

何でも言う事になったのか。そんなの決まってる。

「いやあ、満天の星空。絶好の“非現実”日和だぜ」

「何でそんなに晴れやかなんだよ、お前は」

この馬鹿な悪友の一言のせいだ。

『それって、“鍵”である俺達は、ソロモン七十二柱のあんたらと“契約”しなきゃいけないんじゃないか？』

確かに、僕らがもし（・・）“鍵”とかいう存在だったとしたら、そうするのが一番なのかもしれない。けど、僕達は『普通の』高校生。そんな特別な存在なんかじゃない。

第一、彼女の言ってることが全て本当とは限らないじゃないか。

この男は人を疑うってことを知らないんじゃないかな？

「それぐらい分かってるって」

「今僕の気持ち読んだ！？」

「そういえば今更だが」

「無視！？」

「その契約方法って何なんだ？」

瞬間、世界が止まったような気がした。

ただ一人、紅髪の少女だけが。

「……………」

「なあ、教えてくれよ。そうしなきゃ俺達だって協力できないぞ」

「……………そ、それは」

「目を逸らすな、目を」

「あらあら、私達が代わりに説明しましょうか？」



「いい。むしろコイツにやらせてくれ」

「ひゃうっ！」

意外と可愛い声を出す紅髪少女。

それでも崩の攻撃は終わらない。

「へっへっへ……。さあおじちゃんに話してごンスッ！？」

「止める変質者かお前は！？」

とりあえず危なそうなので頭にチョップ。本当に何をしでかすか分からないなコイツは。

すると、相手がいなくなった紅髪少女と黒髪の女性が会話しているのが目に入っ。

「……………、マリー？ 言いたくないなら私が言いましょうか？」

「……いい、自分で言うわ。あんな“鍵”<sup>ガキ</sup>なんかにナメられて」

「そんなの簡単じゃーん」

た瞬間に、黄髪の子が、小首を傾げながら。

「“鍵”と私達が『キス』して終わりじゃん」

とんでもない爆弾を投下していった。

……。

……。

……………。

どうしよう、脳の許容範囲が追いつかない。えーっと、どういう事だ？

「文字通り、キスすりゃいいんだろ？ こいつらと」

「やっぱりかあああああっ！」

僕は頭を抱えて絶叫した。ここが森じゃなかったら、近所迷惑もいいとこのレベルで。

「まあ、天命だと思って諦めろ」



「爽やかな笑顔止める」

悪友の台詞に脊髄反射でツッコミながら地面に突っ伏す僕。

「ま、すでに一人、逃れられなくなってる奴がいるしな」

「え？」

「……………た、頼まない（たのむ）…………、助けないで（たすけて）くれ」

突っ伏したまんま萌が向いた方向を見ると、ちょっと離れた所で菰が困惑した表情でこっちに助けを求めている。

その腕には、白髪の少女　セエレがしがみついていた。

それは、ほんの少し前に遡る。

「なあ、芹、萌」

「「うん？」」

彼女ら　悪魔達の登場のショックをどうにかこうにか峠を越えた頃、僕達は突然菰に声をかけられた。その視線はすごく真面目だ。  
「どうしたのさ、菰？」

それが少しばかり気になった僕が菰に訊ねてみると、彼は唐突に指を立て、ある少女を指した。白髪の少女　セエレ……………だったっけな？

「彼女がどうかしたの？」

「気に入ったんじゃないの？」

呑気な口調で口を挟む萌。お前は黙ってる。

「……………この子<sup>あの子</sup>」

すると、菰が何かを呟き。

「……………天使<sup>あくま</sup>？」

そして、小首を傾げていた。

うん、確かに疑わしい。突然街中で『この子何に見えます？』とか訊かれたら何の躊躇いもなく『普通の人間』と答えてしまうだろう



う。特にこの子は、例え悪魔だと言われても……何と言つか……。

「……………派手、だな」

「ああ、そんなハッキリと」

「本当ですか!？」

「……………え?」「」

突然耳に響いた声に弾かれるように向くと、ウワサの張本人が瞳を輝かせてこっちを見ていた。一体何が嬉しいのだろう、あんな事言われ。

「……………あ」

分かった。

理解できた。

この子は、菰の言っていることを真に受けてるんだ。

「……………あー、ドンマイ 菰」

「……………嬉しい(うれしくない)」

そう言って心の底から溜息をつく友人に、僕は同情の念を隠せなかった。

「そつえばそうだったね」

現実に戻ってきた僕は、呑気な口調でその光景を見守る。でも、良かったじゃないか菰。そんな可愛い子に好かれちゃってさ。う、羨ましくなんかないんだからねっ! (ツンデレ)

「……………良かった(よくない)。しかし、似合うなあ(し、にあわない)」

「ちよつと待つて菰、君も僕の心が読めるのかい?」

僕に集まる奴って、みんな読心術師なんだろうか。

でも、菰がそう言いたくなるのも分からなくもない。突然、可愛い女の子に好かれるとちよつと狼狽するし。



「あのー、セイレさん？ 菰は『地味』って言いた」  
「殺しますよ？」

彼女、性格に難があるらしい。

あの子はどうも、『地味』と言われるのが物凄く嫌らしく、一度その言葉を言ったが最後、（彼女の特殊能力なのか）どこぞの核兵器を平気で持つてくる（必死で止めたけど）。ホント同情するよ、菰。

「あれ、皆さん“契約”しないんですか？ だったら私が最初に」  
「あ……」

僕らが呆然としていると、当の張本人<sup>セイレ</sup>が菰と唇を重ねた。

すると、二人の足元に奇妙な模様の円陣が浮かび上がり、徐々に光が彼らを包む。やがてゆっくりとその光がおさまると、菰の中指に筒状の指輪が赤銅色に鈍く輝いていた。

「な、何あれ？」

「まあ、今までの経緯から言って、ソロモンの指輪とか言うんじゃねえか？ 確かあれ、付けてると悪魔を使役できるらしいから」

「そうなの？」

「そうね、そういう呼び名もあるわ。でも私達の間では、ただの“契約”の証にすぎないわ」

僕達の会話に割って入ってきた紅髪の少女はそこで言葉を切ると。

「私達と“鍵”をつなぐだけ（・・）の」

そう言った。

妙に重たい言葉で。

「……………」

僕は何故かその言葉を聞いた途端に、とんでもないことをしてしまった、という気持ちが今更になって感じられてきた。

「あらあら、そんなに悲観にならなくてもいいのよ？ いつまでもあそこに引きこもってるのにうんざりしてた所でしたから」

「そーそー、私達は私達で自由にやらせてもらうよ。何てったって悪魔だもーん。なーんて」



対するこの二人は、こっちに強制的に來させられた事を樂觀的に捉えているようだ。貴女達はもう少し危機感を持ちましょうよ。

「それよりも、大事なことは私達と君達の誰と誰が“契約”するか、じゃないかなあ？」

待つて下さい。僕の周りには何人の読心術師が存在するんですか？ 毎日思うがどうして僕の周りにはロクな奴がいない。

「決まっているだろう。俺が四人だ」

「あ、どうぞどうぞ」

「ダ ヨウ俱 部か！？」

そんな僕もロクな奴じゃないのかもしれない。

「却下よ却下。それだとあまりにも不公平じゃない」

「あらあら、流石は正義の悪魔ね。そうね、確かに不公平ですわね」と、当然よ」

ダンタリオンの台詞に、ない胸をちよつとばかり張るアンドロマリウス。おそらく萌にいじめられたから、あいつの従者になりたくないんだろう。

「じゃあ、公平に二人ずつ“契約”する。それでいいわね？」

「おっけーい」

いや、お前には訊いとらんだろ、とツッコミそうになるのを何とかこらえている間に、紅髪少女が頷いていた。

「じゃあ、まずは私からでもいいかしら？ うふふ、先に茶髪の坊やと“契約”して、貴女の困る表情を見てみたいけど」

ダンタリオンは艶めかしい笑みを浮かべながら、萌の方に近付くと「こっちの方が、面白そうだわ」

そのまま、まるで怪盗のように華麗に萌の唇を奪っていった。あいつの右手の中指に赤銅色の指輪が嵌る。

「あー、私も私もー」

続けざまに、黄髪の子も記者の突撃取材ばりの勢いであつという間に契約完了。  
ジャーナリスト

残される僕ら三人。そして、嫌な沈黙。



「ガンバ 芹」

「はあ、やっぱりそうなるのか……」

目の前にある現実を受け入れなきゃいけないのか、と嘆息するその瞬間。

「……………頭下げて」

ぐいつ、という音が出そうならい力でシャツの襟首を引つ張られるまま頭を下げると、そこにはプルプラスの人形のような顔が展開される魔法陣。

一瞬の接触の過ぎると、僕の右手にあの指輪が嵌められていた。契約完了ってことか？ でも僕のファーストキスがこんな簡単に取られると、何か悲しくなってくる。最初は『普通の』人間がよかったなあ……………。はあ……………、こんな事するんじゃないかったなあ。

「……………安心して。私も初めて？ だから」

なぜ疑問形になるのか、僕は知りたいよ。

でも何だかんだで、残るはただ一人。

「あああら、これで最後の一人になってしまいましたね、マリー」

黒髪を揺らしながら、腹黒そうな笑顔を見せるダンタリオン。多分あの人は純粋なSなんじゃないかなろうか？

「わ、分かてるわよ。“契約”すればいいんでしょ！」

だ、大丈夫最初のをれを思い出せばいいのよ、……………多分。と徐々に尻すばみになっていく紅髪少女の声。

だ、大丈夫かなあ……………。

そう思いながら正面を向く。

「「うつ！」」

そして、思わず呻き声をあげる僕ら。

そりやこうなるよ。さつきは認識する暇もなく契約が終わったけど、今は互いに意識した上での行為。緊張するに決まっているじゃないか！

それに、彼女メツチャ綺麗じゃん！ 白磁のような肌、伏せがちな瞳、整った顔。僕にはちよつと高値の花すぎるって。



「か、勘違いしないでよね。別にあなたの為にするわけじゃない」  
やがて、僕の目の前に辿り着いた紅髪少女は両手で僕の頬を固定。  
眼前で瞳を潤まされ、僕の思考は完全停止。そして。  
「この戦いを本当の意味で……………」終わらせる為にするんだからね」

気が付いた頃には、もう契約は終わっていた。



## 契約 - 五日深夜（後書き）

次回からは、芹くんと一日を中心に書いていこうと思います。  
……戦闘パート、いつ書けるかなあ（遠い目）。



喧騒・五日早朝（前書き）

……おかしい、こんなハズじゃなかったのに。  
約一週間ぶりの投稿です。遅れてすいません。ネタが出ませんでした。反省はしていませんが、頭の中で自分を絶賛説教中ですので厳しいことを言われると凹みます。温かい目で見守ってくださいと幸いです。



## 喧騒 - 五日早朝

八月五日午前六時三十六分。

「……ふあ」

突き刺さる日差しに目蓋を強制的に開けさせられた僕　鯨井芹  
は、平穏な静寂の中で欠伸を噛み殺していた。

「あれ、もうこんな時間だ」

ベッドの横に置いてある目覚まし時計で時間を確認し、ボソリと  
呟きながらベッドを降りる。

あの一夜が過ぎた。

僕は“鍵”とやらとして彼女達　ソロモン七十二柱と“契約”  
した。

そして、自分が契約した悪魔を自分の家に連れて帰る事である夜の  
は幕を引いた。

「……………はあ」

思わず溜息が漏れる。

そりゃあ、今は父さんも母さんもないからいいけど、もし帰っ  
てきたらボツコボコにされると思うと嘆息ぐらいしたくなる。何で  
こんなに晴れやかな朝なのに、こんなに憂鬱な気分にならなくちゃ  
いけないのだろう……………？

「……………起きるか」

ずっとこのまま現実逃避したかったけど、現実はその簡単に覆る  
ことがないのを昨夜思い知ったので、立ち上がって部屋をあとにし  
て彼女達が寝ているハズの部屋に向かった。

この家は二階建てで広さも普通の家と比較しても大差はないが、  
ある一点だけ他の家とは大きく違ってしていることがある。

それは一階が　地下にある事だ。

職業が考古学者だからなのか、どうもウチの両親は地面より下の  
部屋じゃないと作業が集中できないという変わった性癖の持ち主だ。



なのでこの家では、普通の家の一階は二階となっている。

まあ、今はそんな事どうでもいいんだけど。

「……確か、彼女達は一階と二階に分かれてたっけな？」

正直、面倒くさい。

どうも、悪魔と言っても朝に弱いワケではなく、普通の人間と同じサイクルで生活しているのだそうだ。けど、二人の意見は真つ向から食い違い、普通の生活をしていたアンドロマリウスは二階、ちよつとインドア派だったプルラスは地下に寝ることになった。

「全く、起こす僕の身にもなって欲しいよ」

一人ごちる。

厄介事を抱え手間が増えただけ、対してこつちの見返りはゼロ。まさに百害あつて一利なし。

嘆息。

しばらくしてアンドロマリウスが寝ている部屋の前に立ち、ドアをノックする。

「おい、朝だぞ。起きろ」

「……………」

静寂。

「……………開けるぞー」

沈黙。

寝かせておいてそのまま存在をなかった事にしたいのだが、生憎彼女達は消えてはくれないので仕方なく直接起こすことにした。

「おい、起き」

そして、その扉を開けるとそこは 魔窟だった。

目の前に足の踏み場のないほど散乱する衣類、日常品。さすが悪魔としか言いようのないぐらいの散らかりようが相当頭にくる。

……いや、まだその段階なら許そう。その類ならまだ片づけられればいいだけだ。けど。

けど、それらと一緒に転がってる厳つい白銀の拘束具たちが、



どうしても理解できない。

「何でこんなものがあるのさ　　っ!」

とりあえず、僕はシャウトせずにはいられなかった。

前の二つはまだ分かるよ。けど、拷問器具が一般家庭の床に転が  
ってるっておかしくない!?　どこのイギリス正教!?

「……………ううん、っるっさいわねえ……………」

日常に襲いかかった“非現実”に目を疑っていると、その先のベ  
ッドから紅髪少女のうるさそうに声をあげた。

「う、うるさいって何だっ!　ちよつとそこにながあっ  
カチャンッ。」

ちよつと頭にきたので説教しようとして部屋に一歩足を踏み入れた途  
端、何かに足を滑らせて転んでしまった。顔、痛っ　。

……………かちゃん?

ふと、その音のした方向に視線を向けてみる。

両手に、手錠。

「な、なんじゃこりゃあふう」

某優作な台詞を言おうとした瞬間、僕の体がフローリングを滑走。  
見ると天井に滑車。

あーなるほどー、僕はあれに引きずられて。

「何でそんなものが天井にあるんだよおおっ!」

絶叫のまま滑車はロープを巻き上げる。

その数秒後　。

ガッシャーンッ!

僕は、何故か檻の中にいた。

どうしよう、あまりに意味不明な流れなんだけど。ええつと、簡  
単にまとめると　。



この紅髪少女を起こしに来た。

部屋の惨状を看過できずに起こそうとした。  
様々な経緯を経て飼育人間の完成。

「う、嘘だろおおおっ!!」

「つたく、本っ当にうるさいわねえ……」

すると、この光景を作り上げた張本人が、二度目のうるさそうな声を発しながら上体を起こし始めた。僕は目覚まし時計代わりか!?  
「そうよ」

「だから、僕の心を読むなって言って　　じゃない。とりあえず、これ解いてくれないか?」

思わず強くツツコミそうになるのを必死にこらえながら精いっぱい  
の誠意を込めて脱出の手伝いを懇願する。こういう所『も』普通の  
高校生なんだから手伝ってほしい時は頼む。

たったそれだけの事をしただけなのに、彼女は僕を明らかに機嫌  
が悪そうな(……)目で見るや否や、こんな言葉を浴び  
せてきた。

「はあ? 寝言は寝て言ってもらえる? 何で私があんたを助けな  
くちやいけないのよ?」

「なっ!?!」

「いい、ここでハッキリと言っておくわ。私はね、あんたたち人間  
が大っキライなの」

さらに、手で『あっちいけ』のジェスチャーをする彼女に、流石  
の僕も堪忍袋の緒が切れた。

「ふ、ふざけんなっ! 人がせつかく親切に起こしてあげようとし  
た仕返しがこれか!? 人間が嫌いだか何だか知らないけど、少し  
は他人を優しくすることが出来ないのかよ。もう分かった、お前の  
助けなんて絶対借りないからな!!」

じゃあ勝手にすれば? という言葉と共に去っていく彼女を眺め



ながら、脱出の手段に頭を働かせていた。

\*

「や、やっと出られた……」

「……………お疲れ様」

あれから三時間後、いつになっても下に来ないことを心配したプルフランスに助けてもらった僕　芹は、足が地面に付いてる事のありがたみを味わっていた。

「全く、酷い目にあつたよホントに」

未だに残るあの女への呪詛のように怒りの言葉を呟きながら、リビングとフローリングの廊下を隔てるドアを開ける。するとそこには十帖ほどの、奇々怪々な置物がそこら中にある以外は一般家庭と何ら変わらない空間が目に入ってきた。いつも見る光景なのに、随分と久しぶりに見た様な感覚がするのは気のせいだと思いたい。

「……………あまりマリーを怒らないで欲しい」

リビングに入るとすぐに、いきなりプルフランスが頭を下げてきた。

「ど、どうしたのいきなり？」

突然の反応に戸惑う僕。

「……………芹がああなつたのは、彼女が寝起きが悪いことを伝えなかった私の責任。普段はあんなことはしないから」

無表情な顔のまま申し訳なさそうに理由を話すプルフランス。いい子だなあ……………。

「いや、君が謝ることはないよ」

僕は、そんな彼女の頭を撫でながら優しい口調で諭すように言う。「でもね、いくら本心じゃなかったとしても謝らなきゃいけないことは謝るべきだと僕は思う。だから、彼女が謝ってくるまで僕は許す気はないよ」

どんな理由があろうとも、悪いことをしたなら自ら『悪い』って言われるまでその相手を許しちゃいけない、そこは揺らいじやいけない、と言われたのは、口くでもない両親の数少ないマトモな教訓



の一つだ。

「ま、そのうち分からせるつもりだけどね。……さて、遅くなっちゃったけど朝食にしようか。何作って欲しい？」

ひとしきり言いたいことを伝えた僕は、その場で大きく伸びをしながらキッチンに向かいリクエストを訊く。するとプルfrasは首をゆつくりと横に振り。

「……………いい」

彼女にそう言われふと洗い場を見ると、確かに水を張った桶に、いくつもの食器が沈んでいた。

一体何を作ったのかは分からないが、少なくとも“誰が”作ったのかは容易に理解できた。

恐らく調理場に使用した場所に移すと、そこには無残に放置された皮やら殻やらの姿。間違いない、あの女の仕業だ。

「うわぁ……。あの女、本当に片づける能力が皆無じゃないか。本当に」

そんなグチを言いながら、卵の殻を拾おうとした瞬間。

乾いた足音と共に、黒く光る『何か』が現れた。

「い、いやあああぁっ!!」

僕、堪らず絶叫。そして家具の隙間へと消えるアンチクショウ。び、びつくりした上に、戦慄すら覚えた。未だに響く特有の乾いた足音が、尻もちをついている僕の背筋を寒くした。

「……………どうしたの？」

危険生物の邂逅から数秒して、プルfrasが僕の近くまでかけ寄ってくる。何があっただって顔だ。

僕はそんな彼女の両肩を、震える手でガツチリ掴むと。

「あ、現れたんだよ。ついに僕の家にも。あの、三大危険生物が」  
「……………は？」



何が起こったのか分からず、キョトンとした表情の彼女に僕はさらに続ける。

「いいかい？ この国には……いや、世界には三大危険生物がいるんだ。」

素早さの黒（俗に言うG）

攻撃の黄色（蜂）

重量のこげ茶<sup>ムカデ</sup>

という名前で恐れられる存在がいるんだぞ」

すると、彼女は何か見つけたのか、視線を逸らし右手を動かした。

「……もしかして、これ？」

親指と人差し指で、カサカサと動く生命体をこちらに向けた。

「ひ、ひいいいいいっ！！」

僕、再び絶叫。そして、そのままの姿勢で後ろで全力ダッシュ。

「………」

プル fras はそんな僕と素早さのアイツ（僕命名）を交互に見た後、おもむろに窓を開けてそいつを投げ捨て、素早く閉めた。

「………」

僕らの間にゆっくりと満ちる静寂。

最初に口を開けたのは、あっちだった。

「………虫、怖いのか？」

「……はい」

その後再び嫌な空気が流れたのは、言うまでもない。



喧騒・五日早朝（後書き）

今回は二回に分けてお送りする形になります。

ヤバ、こう書いてるとプルプラスが可愛く見えてきた。こんなハズじゃなかったんだけどなあ……。

次回も鯨井家の朝が続きます。

何時になったら戦闘できるかなあ……？



疑問・五日朝（前書き）

投稿が随分と遅くなりました。今回は反省しています。

楽しみに待っていた方、どうもすいません。

そして、その割には文章がダメダメなことも温かい心で許してください。

それではどうぞ。



## 疑問 - 五日朝

「そういえばあの女、どこいったんだ？」

あの騒動から数分後、冷蔵庫にあった残飯を使って遅めの朝食を食べ終わった僕　芹は、向かいのソファに座ってる幼女　プルフランスに訊ねた。

「……………多分、マリーは、部屋に、戻って寝てると、思う」

再び無機質な表情でこつちを見ながら彼女は応える。因みに今、彼女は間食としてスティックパンを食べている。多分、『電動スティックパン食べ機』とかあったらこんなのだろうな、と思わず考えってしまうぐらい絵になる光景だ。

「寝てるって……………」

予想はしていたけど、その通りの返事に思わず溜息が漏れる。あの女本当に昼夜逆転してるんじゃない。

「　　そういえば今更なんだけど、マリーってもしかしてあの女……………じゃなかった、アンドロマリウスのこと？」

頭に浮かんできた疑問を目の前の電動パン食べ機に訊ねると、プルフランスは一瞬呆然とした後に首肯する。

「……………うん、そうだけど。今更？」

「うん、今更」

またもやポカンとした表情を浮かべるプルフランス。

「……………どうしてそんな事を？」

「いや、単純に気になったからだけど……………」

「……………そう、分かった」

彼女はそう言って頷くと、その理由を語り始めた。

あの女　アンドロマリウスの本名は、この名前ではないらしい。彼女達が話す“ソロモン七十二柱”というのは個人名ではなく、あくまでも『種類名』。つまりは『家族名』に近いものだというのだ。御家柄とか言うものなのだろうか？



閑話休題。

「つまり、あの女には“アンドロマリウス”って名前以外の名前があるってことでいいんだよね？」

「……………そう」

あつさり首肯。

「じゃあ本当の名前ってなんなのさ」

「……………知らない」

今度はあつさり否定された。

「知らないって、君達は『仲間』じゃないの？」

「……………そう、私達は仲間」

「じゃあ何で」

「……………けど、仲間の事を全て知っているほどの仲じゃ、ない」

「そんな言い方しなくても……………」

「……………じゃあ、芹はあの二人の全てを知っているの？」

「う……………」

図星なところを突かれ、思わず言葉に詰まる。

「……………それと同じ。どんなに仲が良くても知らないことはたくさんある。それを認めながらお互いを知っていくのが、本当の付き合いだと思う」

さらにプル fras がこれでもかといわんばかりに畳みかける。うう、全てが正論すぎて入り込む隙間が全く見当たらない。こ、これが悪魔の実力か……………っ。

「……………ご、ごめん。僕が悪かった」

「……………何で、謝ってるの、芹」

「う、ご、ごめん。分かったからもう、いいかな？」

「……………？ 芹が止めたいならいいけど」

僕が止めるように懇願すると、彼女は小首を傾げながら、そういうことだから、と最後に言い残して話すのを止めてくれた。良かった……………。彼女達の腹の中を探るのは、今は止そう。

「じゃあ、次の質問にいつでもいいかな」



「……………？別に構わない」

相変わらずの無表情に戻ったプルプラスがこっちを見ながら応える。か、可愛　いや、こっちは重要な話だ。気を引き締める、僕。『ずっと訊こうと思ったんだけど、僕達は何をすればいいのさ？』その気迫を察したのか、彼女の表情も真剣な雰囲気を漂わせ始める。

「……………聞いて、なかったの？」

あれ？　もしかして怒ってる？

「い、いやちゃんと聞いてたよ。嘘じゃナイヨ？」

い、いかん、語尾が片言になっている。うっ、プルプラスの目が疑いに満ちてるよお。

「……………“鍵”の役割は、私達ソロモン七十二柱の能力を使い、封印する事」

「そこだよ。能力って何さ？」

「……………能力は、私達が個別に持っている力」

「能力……………」

そう言われて、ふとあの女の事を思い出した。

真紅に輝く、“何か”を見抜く瞳。

あれも彼女の言う『能力』なのだろうか？

そう考えると、僕達は何かやらなきゃいけない気がしてきた。その所も訊いてみなくては。

「……………大体言ってることはわかった。それで僕達が出来ることって何かな？」

「……………特にない」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ツッコんで」

「あ、ごめん」

まさか彼女の口からそんなオチが来るとは思わなかった。



「…………でもほとんど何もなくてもいいのは、本当」  
「え？　どういうこと？」

「……………“鍵”の周りには、禍わざわいが起こる、から」

「禍…………？」

そう、と頷いたプルフランスの目には、いつものように一切の感情が消えていた。でも、どうしてもか、その感情に違和感を覚えた。

僕がそのことに追求しようとしたその時　。

「あー、騒がしいわね。さっきから」

さっきと同じパジャマを着たあの紅髪少女が、眠気眼をこすりながらリビングに入ってきた。何て見事な空気殺し（エア・ブレイカー）。

「……………」

「……………何よ？　変なものを見るような目は」

この壊れた雰囲気をまるで物ともしない態度に思わず呆然としている僕らをよそに、彼女はスタスタとキッチンと向かう。

「……………何、あれ」

「……………多分、寝起きの事は覚えてないんだと思う」

そんな彼女に気付かれないように隣のプルフランスと小声で緊急会合。やはり悪魔というのは朝に弱いものなのだろうか？

「さて、何を作るのかな　？」

包丁を握りしめ腕まくりしながら、食材を前にする紅髪少女。改めて確認したがやっぱりあの女が作ってみたいだ。

とんとん。

ぽいつ。

とんとん。



ぽいつ。

とんとん。

ごしゃっ！

僕はリモコンをブン投げた。

「何すんのよっ！」

「堂々と飯を作り始めるな

っ！！」

一体どういう神経してやがるんだこの女。まるで傍若無人を絵にかいたような行動しやがって。

「しかも切った食材を床に置くな！ 貴様の辞書には『片付ける』という言葉はないのかっ！」

「うるさいわね。私がここまでしてるんだから、むしろ感謝して欲しいくらいよ」

「部屋を汚されて、感謝する人間がどこにいる！？」

「家事をしてるんだから、お、多めに見てくれたっていいじゃない」

「それとこれとは話は別だ！」

「ああもう、だから人間は嫌いなものよ！」

「何でそういう話になるんだよ？」

「そりゃあんた達が私達を」

ふいに、彼女の言葉が途切れた。

「私達を……、何だよ？」

すぐさまそこに突っ込むと、な、なんでもないわよっ、とはぐらかされ、彼女はそのまま料理を再会し始めた。

あまりに露骨な話の逸らされ方に、深く追求しようとした瞬間。

「スト        ップ！」

僕は待ったをかけた。

「こ、今度は何よ？」

身構える紅髪少女。そんな彼女に向かって僕は声高にこう言った。



「お米のとき汁を、流しに捨てるなつ。それはサボテンちゃんのお水なんだ！」

「……………」

瞬間、世界が止まった。……………かのように思えた。

何故だろう、何かものすごい間違いを犯した気がする。

「……………私、あんたがあの中で一番まともだと思っていたけど、大した差はないことが今分かったわ」

「……………サボテン」

アンドロマリウスの哀れむような視線がすごく痛い。

「な、何を言ってるんだ。そんなワケないじゃないか。ねー、サボテンちゃん」

「あんたさあ、今自分の姿を一度鏡で見た方がいいわよ」

かろつじて残ったとき汁をサボテンにあげていると、今度は呆れた声が聞えてきた。

「うう、サボテンちゃん、皆が僕をいじめるよう」

「……………あんた友達少ないでしょ？」

「何を言う。ちゃんと友達ぐらいいるよっ」

「あの二人を抜いて」

「……………い、いるもんっ」

「今の間は何？」

「……………薺だろ、薺だろ、……………薺だろ……………」

「思いつきり一人だけじゃない」

「そ、そんなことないやいっ！」

「目から出てるのは何よ……………」

あれ、目から汗が止まらないや。

「……………なぜな？」

瞬間、思考が止まる。

続いて、背筋が凍りつくような感覚に襲われる。



「わ、忘れてた……っ」

「どうしたのよ」

「薺が……、薺が来るんだよ！」

刹那、家中に響く呼び鈴の音。

次いで、聞き覚えのある女の子の声。

間違えない、彼女だ。

「ど、どどどうしよう!？」

「あからさまに慌て始めたわね」

そりゃそうだろう。幼馴染の両親容認の世話役に、自分の世話対象が女の子を連れ込んだなんて知れたら僕に何かしらの被害が及ぶことは必至。下手をしたらあの両親に連絡されて、仕送りを止められるかもしれない。まさに死活問題。デット・オア・アライブ

何とかしなくては。

そう決めてからの僕の行動は早く、神速の如き速度で紅髪少女の手を掴みリビングを出ようとした。

が。

「ちよつと、離しなさいよ」

当の彼女は、僕の気持ちを全く感じていないかのように拒絶反応を示す。まさかこの女、僕の状況を理解した上でこの行動に出てやる……？

『芹、入るよー』

玄関の方から、扉を開けるような音。ここに来るのも時間の問題だ。ヤバイ、マジでヤバイって。

「頼むっ、今は隠れていてくれ！ さっきの事を怒っているなら謝る。ここで薺にバレるのは本当にヤバいんだよ！」

それでも動いてくれない彼女に、僕は半ば強引に引っ張ろうとした瞬間。

「知らないわよそんな事！ 離しなさいって言うてんのよ！」



彼女の空いた手に握られた黒鈍色の何かが、僕目がけてしなるように向かってくる。あれは 鞭？

「うわわっ！？」

僕が驚転の声をあげるのと、左腕が頬に向かって動いたのはほぼ同時。

一瞬の交差。そして、左手の甲に鈍い痛みが迸る。

「！？」

「痛つたいなあ」

勢いよく弾かれた鞭を掴み、素早く引き寄せる。こんな危険なもののはボツシュートだ。

が。

「きゃっ」

あまりに強く引きすぎたのか、何故か彼女まで一緒にこっちに向かっていった。ちよつと待つて、この勢いのまま突っ込まれたらバランスが崩れる気が。

と思っている時には、僕はリビングのドアに頭を強かに打ちつけていた。

そして、その上には例の紅髪少女。

「何！？ 大丈夫せ……………り」

その音を聞きつけた薺がドアを勢いよく開く。邂逅。

「……………」

「……………」

「……………」

長い沈黙。

「……………あー」

「……………な」

「えーつと、これはー」



「……なななーなな、ななななななー」

「落ち着いて薺！ “な”の旋律がチャルラになってるよ」  
こんな事態でも僕のツツコミは健在らしい。

「な、な、何してるのよ芹っ！！」

「あ、落ち着いた」

「何に感心してるのよっ」

しまった間違えた。

「ご、誤解しないでくれ薺。これは故意とじゃないんだ」

僕は真上でようやく落ち着きを取り戻した薺に向かって、『どう  
ど』となだめるジャスチャーをしながら必死に誤解を解こうと試  
みた。両親に見放されたら、僕は生きていけない！

「へえ……、故意じゃないなら何なの？」

するとその思いが伝わったのか、彼女がいつもの調子で訊き返し  
てくる。よしっ、まだまだ交渉の余地はあるかもしれない（若干声  
音が低いのが気になるが）。ここは言葉を選んで慎重に……っ。

「故意じゃなくて……、任意なんだ」

「余計に悪いじゃない！！」

やってもうた      っ！

「とりあえず、義母おかあさんに連絡するから」

「止めてっ！ 僕の生命線がっ！！ って、本当に携帯持ってるう。  
ちよつと君からも何か言ってよ」

「そんなの知らないわよ！ いいから早く離れなさい！！」

「あ、もしもし董さん？」

「うわああああ、助けてプルプラス。薺を止めて！」

「……………早起きはやっぱり眠い……………」

「もう嫌だ      っ！！」

この事態を収拾するのに、かなりの時間を消費したことは言うま  
でもない。



もう嫌だ、こんな生活。



疑問・五日朝（後書き）

……今度からは、早めにあげられるように根性に鞭打って頑張りた  
いです（泣

これから先の予定がいっぱいですけど。



## 第一回ファミレス会議・五日昼（前書き）

なんとなくですが、体内時計ができあがっていつてるような気がします。

毎週水曜日？金曜日の間で出していける、そんな気がする。

この調子で頑張っていこうと思います。



## 第一回ファミレス会議 - 五日昼

「「トレードを要求する（しない）っっ！」「」」

うだるような太陽の熱視線がさんと降り注ぐ昼下がり、僕  
鯨井芹たちは辺りの人達など物ともせず、大声で、声高に、寸  
分の狂いもなく言い放った。

直後に、突き刺さるような視線の嵐。

「……まあ、座ろっか」

「……そうだな」  
「……異議」

座席に着き、水を一杯仰いで気持ちを落ち着かせる。

僕達がどうしてここににいるかという、あの後何とか誤解を解い  
た僕が何気なく打った。

『こんな生活もう嫌だ』

の一言を、ダメ元で二人にメールを送ってみたところ、意外にも  
あっさりと集まることになり、現在に至る。

「まさか僕達全員が集合するなんてね……」

「俺は薄々思っではいたがな。菰はあんなだし、お前は自称『普通』  
な人間だからな」

「そういうお前は、何でここに来たんだよ」

僕がそう訊ねると、奴は大仰に頷きながらこう言った後。

「決まっているだろう。お前らの悪魔を俺が貰いに来」

「「じゃあ、お願いします（しません）」」

「……………すまん、悪かった。それだけは勘弁してくれ」

全力で土下座した。



「それにしても“非現実”好きのお前が、テーブル席に座って全力で土下座するのを見る日が来るなんてね……」

「ああ、流石『悪魔』の名は伊達じゃねえな」

「……………そう思わない（おもう）」

再び座りなおす萌と、その隣で力強く首肯する菰。僕はそれを見て、ふと疑問が浮かんできた。

この二人は、一体どんな仕打ち　もとい、時間を過ごしたんだろっ……？

「……………どうしてか、お前の顔に『この二人はどんな仕打ち　もとい、時間を過ごしたんだろっ……？』っていう風に見えて仕方ないんだが……………」

ふと気が付くと、萌が僕の顔を訝しむように見つめている。

「はっはっは、何言ってるんだい？　僕がそんなこと考えるワケないじゃないか」

「……………そうか、すまん。ちょっと人間不信に陥るようなことがあったな」

「『仕打ち　もとい』なんて考えてナイヨ？　ホントダヨ？」

「あからさまに片言じゃねーか！！　ってか本当に考えてたのかよっ！」

「うるさい人の心を読むな！　二次元慣れ爆発しろっ！」

「何だと！」

「……………っ！？　頼まない（む）！！　騒げ（しずかに）っ！

奴が来ない（くる）っ！！」

いつものような諍いになるうとした途端、菰が今までにない剣呑な表情で僕達を止めに入ってきた。その瞳には明らかな焦燥の色が浮かんでい　。

なんて思っていた瞬間、僕達はテーブルに叩きつけられるように、



頭を下げさせられた。

思わぬ展開に困惑していると、低い声が耳元で囁くのが聞えた。  
菰の声だ。

「……………騒いで（しずかにし）てくれ…………っ！」

何のことが分からないが、今見える範囲の視界を全部使ってファ  
ミレスの外を眺める。

するとそこには、必至の表情で誰かを探す、セーラー服の白髪少  
女の姿が目に入った。

どうやら、こっちに向かってきて　。

「……………」

そして、僕達との距離を近づけていく……………。その距離は五メ  
ートル、四…………。

「……………」

三メートル、二…………、一…………。

「……………」

瞬間の交差。

そして、深い安堵の溜息。

それをたつぷり七秒ほどした後、最初に口を開いたのは萌だった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

僕がふと頭に浮かんだ疑問を口にする、菰の隣にいた萌があか  
らさまに『はあ?』といわんばかりな表情でこちらを睨んだ。



「あのなあ、怖くなかったらここまで焦らねえだろ？」

「そ、そりゃそうだけど……」

こいつの言うことは、全面的に信じる根拠にはあまりにも物証に欠けるので、直接本人に訊くと、彼は首肯をするが。

「……いい子わるこやっではない」

とんちんかんな答えについつい頭を捻る僕。

「えっと、どういうこと？」

「お前も分からない奴だなあお前も。それぐらい分かれよバカ。歴史バカ」

無性にこいつの顔をぶん殴りたい。

「……じゃあ一体、どうことなの。萌」

握られた右手を震わせながら訊ねると、決まってるだろ、と言葉を切った後、菰を一瞥。

「It's a」

「「真面目にやれ（やるな）」」

「……すまん」

そして、全力で土下座。……ダメだこいつ、早く何とかしないと。咳払いとともに、萌が答える。

「つまりだな、彼女 セエレは良くも悪くも純粹なんだよ」

そうだろ、とこいつが隣に話を振ると同時に、菰は静かに首肯する。

「何でそんなことが分かるんだよ？」

「ふっふっふ、それは内緒に決ま わーお、分かったから飼い主に捨てられた仔犬のような視線は止めてくれ、菰」

確かに、ここで秘密にされたらたまったもんじゃない。彼にとつて数少ない彼女達の対策を知ってるかどうかは、まさに死活問題なのだから。

……あれ？ それが分かる僕も、もしかして相当ヤバイんじゃない？



…？

「答えは文献だよ、文献。幸運なことにソロモン七十二柱の資料は豊富にあるからな、調べるのは簡単だったぜ」

心に浮かび上がった一抹の不安感に苛まれていると、奴が役に立ちそうな情報を提供してくれた。こういう対処法の探索の早さは、この男の数少ない優れた能力だと思う。

「じゃあそれさえ調べれば、彼女達がどんな人物が分かるってこと？」

「まあ、大体な」

「へえ……」

まあ、あの紅髪少女がどういう風に書かれているかわからないけど、多分おおよそ間違いないく悪いことが書かれているだろう。

「嫌だなあ……」

「どうした？」

「いや、先を思うと気が重くな」

「あ、ハンバーグ定食にしようかな」

「人の話を聞け。僕も菰も不安なんだ」

まあそんなにカッカすんなよ、とメニューを開きながら呑気に答える菰。

「今は焦ったって仕方ないだろう？ 確かに菰の境遇には同情しなくもないが」

「僕にはないんかい」

「お前のなんか大したことないんだろ？」

「言ったな！ じゃあ僕が今朝どんな目に遭ったか言ってみろ」

いくらこいつでも、今日僕がどんな目に遭ったかなんて当てられるワケがない。

「そうだなあ……、少なくとも誰かを起こそうとしたらその床に転がってた拷問器具に引っ掛かって、三時間ほど放置された程度のこととはやってると思う」



「そんなこと……、あるわけ……っ」

自分のあまりに扱いの悪さに涙が出た。

「まあ、それは冗談だとして」

「冗談じゃないんだけどね……」

「お前の場合は、何があっても大丈夫だろ」

何を根拠に、と言葉を紡ごうとした瞬間、僕の目の前に萌の右拳が迫った。

「お前、確か武道をやってたんだろ？」

「……………まあ」

確かに、僕は武道というものをやってはいる。けど、それはあくまでも『かじった』程度でしかない。これは親父が、『考古学者たるもの、見聞が狭いことは命取り』という考えの持ち主で、そのせいでなまじ中途半端に武道というものを教えられた。こっちの方が命取りだと思うのは僕だけだろうか。

「それに、最初にそういう目に遭うのは大体お前だし」

何その根拠のない自信。しかも被害者は僕がよっ！

……………と思いつながらふと萌の方を見た瞬間。

「そういうことだ。今はのんびりし」

「……………見・つ・け・ま・し・た・よー」

やんわりとした声が、僕らの鼓膜を震わせた。

そう、萌の背後から現れたのは、菰が恐れているセーラ服の白髪少女。セエレだった一見ただけならば心が和むような笑顔をしてはいるが、よくよく見てみると、背後に異様なオーラみたいなものが漂っている。確かに怖い。

僕は、そんな彼女を見ながら、同居人パートナーに同情の視線を送ろうとした時には。

「あれっ!？」

彼はもう、姿を消していた。



恐らくいち早く危機を感じ取って、逃亡行動へと移行したのだろうけど、ここまで鮮やかだとどこかの忍者の末裔に見えてくる。

しかし。

「まあ、御主人は恥ずかしがり屋なんですから」

彼女はそんな事にも動じる様子もなく、人差し指をピンと立てた右手をあげた。

「『渡国の徒は、玩具を欲す』」

ただそれだけなのに。

目の前に、逃げたハズの菰が現れた。

「え……？」

何のことが分からず困惑する僕や萌を尻目に、菰の腕に抱きつく白髪少女。これだけ見てると羨ましく　ごめん、分かったからそんな目をするのは止めて、菰。

（もしかして、セエレは“物を移動させる能力”があつたりする？）  
（あれを見れば分かるだろうが）

（でも、どうしてここが分かったんだらうね。さっき向こうに行つたばかりなのに……）

「あらあら、そんなの“指輪”をしていれば意外と分かるものよ？」

「今まで迷惑だと思っていたけど、初めて役に立った気がするわ」

「……………！？」

セエレに聞えないようにひそひそ声で話していたら、僕達にも何故か戦慄が迸る。

振り向きたくない。死ぬほど振り向きたくない。

しかし、体は壊れかけのブリキのような音を（セルフで）出しながら、ゆっくりと背後を振り返る。すると。

「「やつと見つけた」」

やつぱりというか何というか。

そこに立っていたのは、ダンタリオンとあの紅髪少女に他二名が



揃った、まさにオールスターだった。

正面を見ると、萌も同じような顔をしているのが目に入ってきた。そういえばこいつは一体何があったのか。

「ねえねえ、また写真撮ったんだけど」

「……………勘弁してくれよ……………。今月の小遣いが……………」

「しょーがないじゃん。だって萌のお父さん、いっぱいカメラ持ってたんだもん」

「だから親父に頼めって……………」

……………なんて訊く前に分かったちゃったけど。とりあえず同情はするよ。

「さあ、私達も帰るわよ。“鍵”にそこら辺をうろちよろされると困るの」

「……………それに、齋とも話も終わってない」

まあ、僕も同じようなものだけどね。

今日、僕達は一つだけ学んだことがある。

だから、今はそれだけを心に刻もうと思う。

『悪魔との生活は、みんな同じような末路を辿る』

そうして僕達は、自分達の相方に半ば引きずられるように帰路についた。



## 第一回ファミレス会議・五日昼（後書き）

前書きであんなこと口走りましたが、これからテスト期間に入るの  
でしばらく出せないと思います。すいません……。

ああ、折角戦闘シーンにこぎつけると思ったのに……（泣）



邂逅 - 五日 逢魔が時（前書き）

テスト期間だからしばらく休みます。

そう書いていた時期が、自分にもありました。

そんなワケで原稿をあげたのですが、今回はすごく雑です。今までで一番雑かもしれません。そのの所を踏まえて読んでいただければ幸いです。



## 邂逅 - 五日 逢魔が時

日本では、多くの時間の呼ばれ方が存在する。

その中に、『逢魔<sup>おつま</sup>が時<sup>とき</sup>』と呼ばれる時間帯がある。

その由来は文字通り『人ならぬものと出逢いそうな時間帯』。

そんな時間帯に、僕 芹達は『アイツ』に逢った。

「初めまして、になるのかな？ “鍵”を持つ少年」

あのファミレスの会合から数時間、薺との誤解を解き、口座から仕送りが途絶えてないことに一人（あの二人もついて来ようとしてたが、流石に自分の預金を知られるのは嫌なので置いてきた）安堵していた帰り道。僕は背後から声を掛けられた。

誰もいなかったことと、妙に聞き覚えのある単語に釣られて振り返ると、そこに美青年が立っていた。

漫画のようにさらりと長い金髪に、マリンブルーの双眸。整った顔に華奢な体型を強調する真っ白な修道服が、バックの沈みゆく茜色の夕陽によくマッチしていて、もし絵にしたら絵画に興味がない僕でも買いたくなってしまふほどだ。

「ああ、別に怪しいものじゃないよ。僕の名前はフランベル・ロイ デイツシュ」

その男 フランベルと名乗る青年は、苦笑しながら、その美貌に比べぬ声音で。

「しがない被魔師さ」

自らを嘲るように¥そう言った。

被魔師。

言うなれば東洋における陰陽師みたいなものであり、悪霊に取り



憑かれた者をその悪霊から救済するのが主な役割として知られている。

しかし、どうしてそんな聖職者がわざわざこんなところにやって来たのだろうか。

でも、その答えは単純明快だということもすぐに理解できた。

それは、たった一つの単語。

「……………」

「どうやら、僕が…………いや、僕達は何なのか知っているみたいだね。話が早くて助かるよ」

フランベルはそんな僕を見るや否や、さっきと同じような笑顔を浮かべる。

まるで貼り付かせているような苦笑を。

「……………」

未だに黙秘を続ける僕。

これはあくまで僕の直感にすぎないけど。

この男は、危険だ。

何の根拠もないけど、何の証明もないけど、自分の中の警鐘が今すぐ逃げると告げている。

「……………貴方達は、一体何が目的なんだ？」

「分かっているくせに」

未だに笑みを貼り付けたまま、僕を見るフランベル。その瞳は見るからに、冷たい。

…………いや、僕じゃない（…………）、か。

「彼女らを、僕達に渡して欲しいんだ」

『悪魔払い』。

それが彼らの別名だ。

「彼女……………」

不意に、僕はプルフランスの言葉を思い出した。



「……………“鍵”の周りには、禍が起こる、から」

もしかしたら、これこそが彼女の言う『禍』なんだろうか？

今の僕に、それを確かめる術は、ない。

「何を躊躇う必要があるんだい？ 君は無理矢理、この戦いに参加させられているのだろう？ なら迷う必要性なんかないじゃないか」

確かに、彼の言うことも一理ある。無理矢理戦いに巻き込まれたくないし、今すぐにだって誰かに譲ってやりたい。けど。

「……………」

けど僕は、何も答えない。

「……………沈黙は、拒否の解答としてみなしてもいいのかな？」

沈黙。

「……………そうかい」

フランベルはそれだけを確認すると、昼と夜の境目の陽を見計らったようなタイミングで右手を天高く挙げた。

マジックタワー

「『汝が“か”』」

「ちよつと待つて下さい」

しかし、僕はそれに割り込んだ。

すると、彼は一瞬だけ冷やかな表情を垣間見せた後、再びあの笑顔を貼りつかせる。

「……………どうかしました？」

そして、全く悪びれもしない言い方をしてきたので、僕はハッキリと言ってやった。

「いきなり何してるんですか？」

「だって、君が僕の提案を拒否したから」

「……………人の意見を無視したら、拒否になるんですか？ 貴方の」

「……………口には気をつけた方がいい」

サタニスト

「本来なら、君達 悪魔崇拜者の言うことなんて耳にも入れたくない」

どうやら彼の仲では、僕は話す価値のない人間だと思われる



みたいだ。

「でも、僕は寛大だ。精神が安定してなかったという事にしといてあげるよ」

「……………どうも」

嬉しくない言葉に礼をしながらも、僕は続ける。

「……………質問しても、いいですか？」

「構わないよ」

じゃあ、言わせていただきます。と切り出しながら。

「貴方……………いえ、貴方達は、僕らから彼女達を手に入れて、一体何をする気ですか？」

一番訊きたかったことを。

するとフランベルは、今まで見たことのないような。

「簡単なことですよ」

まるで恍惚といわんばかりの、爽やかな表情で。

「“飼う”ですよ」

何の躊躇いもなく、言った。

“飼う”。

たったそれだけの単語を理解するのに、数秒の時間を要してしまっ

た。いや、数秒間要しても、一向に何のことなのか理解できていない。どういうことなんだ？……………ダメだ。いくら考えても分からない。

というか、理解したくない。

「……………やっぱり、君には僕達の崇高な目的が理解できないようだね」  
「目的？」

僕がそう訊き返すと、フランベルはこれが答えだと言わんばかりに右手を天高く挙げ。

指を鳴らす。

するとそれを合図にするように、一つの影が現れた。



それは。

「少女？」

何かを引きずるような音を出しながら姿を現したのは、まごっことなく、人間の少女だった。

チョコレートのようなダークブラウンのセミロングに、大和撫子を彷彿とさせる風貌。見た目はあの紅髪少女。僕達と同じぐらいで、フランベルと同じ純白の修道服を身に纏ってるせいか清楚な印象を感じさせる。

でも、おかしい所が三つほどある。

一つは、彼女の瞳が虚ろだということ。

もう一つは、その首についている厳つい首輪。

最後は、その首輪から伸びている鎖が、フランベルによって握られていることだ。

「もしかして……、まさか」

「そういうことさ」

「どうして……？」

「どうしてって、それは愚問だなあ。言っておくけど、僕達は<sup>エクソ</sup>抜魔師だよ？ 彼女ら ソロモン七十二柱や悪魔の偽王国のことを知っていたって不思議じゃないだろう？ それに、いい加減彼女達とのいたちごっこにも飽きたんだよ。ここまで言えば、分かるだろう？」

そこまで言われて、僕はようやく全ての合点がいった。つまり。

この男達 悪魔払いは。

彼女 ソロモン七十二柱を文字通り“飼”い、利用して僕達



“鍵”を殺し、その後世界を破壊する危険分子として処刑する。

これは僕の勝手な推論だが、フランベルの目を見ると的を得ているようだ。とびきりの笑顔をこちらによこしてきた。

それだけで十分だった。

「……………ふ」

こいつを殴り飛ばそうと思い至るには。

「ふざけんなっ！」

激昂と同時に、駆け出す。

彼我の十五メートル弱。近くはないが決して遠くもない距離は、たった数秒経つだけで埋まる。

だが、フランベルはそんな僕に焦るそぶりも見せず言葉を紡いだ。

「『汝が鍵 フランベル・ロイディツシュの名を以って 汝が鎖を解かん 封印解除“嵐雷の徒は、天地を穿つ”』」

すると、変化が起きた。

フランベルの言葉が紡がれると同時に、少女の髪の中から何かが生えてきたのが見えた。

角。

鹿のような、闘牛のような。そんな何にも似つかない角が彼女のこめかみ（…………）あたりから生え、ねじれ、歪んで止まる。

それと同時に、火花が散るような音。

「終わりだ」

弾かれるように音の方向を見ると、角に電流を迸らせる少女の姿。

狙いは 僕。

「《地這う紫電》」  
サンダラス・ロンド

「《正義の邪眼》」  
イーヴイル・ジャステイス



そしてその言葉を最後に、僕の意識は……途絶えた。



邂逅・五日 逢魔が時（後書き）

段々中二っぽくなっていきますが、ファンタジーと中二は切っても切れないものだと思っております。

しかし、今度こそ……今度こそテスト期間に入るので、休む可能性があることだけを承しておいてください。



自宅にて      五日夜（前書き）

テスト機関の為、長い間ずっと投稿が滞ってしまつて、申し訳ありませんでした。本当はもう少し早くあげるつもりだったのですが、思ったよりも執筆能力が落ちていたのでこのような時間までかかってしまいました。あと、こう言い訳したくないのですが、執筆能力の低下により少々文章が拙くなつてしまっているかもしれないので、温かい目で見てくださいと幸いです。



## 自宅にて 五日夜

目を覚ますと、そこは自分の家だった。

続いて見慣れた天井、安らぎさえ覚える毛布の感触を知覚する。

一体どうして僕はここにいるんだろ……？ さっきまでフランベルと一緒にいたハズなのに。しかもよく見たら、服も着替えている。

一体、誰が。

「ようやく目が覚めたわね」

鼓膜を揺らした声は、僕が予想もしてなかったものだった。

目に入ったのは、燃えるようなワインレッドの長髪……………ポニテイルじゃなくておろしているけど。

アンドロマリウスだった。

「な、なんで君が……？」

ワケが分からず目を白黒させていると、彼女は持っているタオルを絞りながら嘆息した。

「助けた張本人に、その言い方はひどいんじゃないの？」

「助けた？」

「そ、あの被魔師からあんたをここまで連れて帰ってきたのは私」  
エクソシスト

「一体、どうやつ」

僕はそこまで言いかけて、止まる。

そつだ、意識が途切れる寸前に変な声を聞いた。

『 サンタラス・ロンド  
《地這う紫電》  
イーヴイル・ジャステイス  
『 《正義の邪眼》 』

あの変な台詞は一体誰が？



そんなの考えなくても分かる。

「……………君が、助けてくれたの？」

「だから、そう言ってるじゃない。耳に穴でも空いてるんじゃないの？」

「空いてないと聞えてないけど……………」

むしろ空いてなきやおかしい。

そう思っただけを見ると、僕の予想に反し何も言わない。  
部屋中に沈黙が落ちる。

少し静寂というものが苦手な僕が何か話そうとした瞬間。

「逃げなさい」

突然発された言葉に、一瞬理解が追いつかなかった。

一体彼女は何を言っただけ？

そこまで思っただけで起き上がるうとした途端、激痛が迸った。

顔を歪ませ腹の辺りを握るっただけ。

「大人しくしてなさいっ！ あ、あんたこんな目にあっただけから」  
そんな台詞がうずくまった僕の頭上から響いた。痛みが治まった  
頃にふと顔を見上げると、あるものが視界に映った。

そこにあっただけのは、真ん中に直径20センチほどの焦げたような  
大きな穴が空いた布地。

さっきまで僕が着ていた服だった。

「何、これ……………」

驚きを隠せず声を震える。

一体、僕の身に何が起こったんだ……………？

その答えは、意外にも早く返ってきた。

「……………撃ち抜かれた……………」のよ。文字通り、地這う紫電  
に」

信じられない言葉とともに。

撃ち抜かれた？

地這う紫電？

僕の中で彼女の言葉がリフレインし、一部の単語が頭の中で宙を



舞う。

あまりに衝撃的な事実、絶句していると、隣からアンドロマリウスの声が聞えてきた。

「だから、あんたは逃げなさい」

それはいつも通り力強いんだけど、顔を力なく伏せる。

「そして、あの子に……私達に関わらないで」

そのせいか、響いた言葉はあまりにも弱々しく聞えた。

再び訪れる沈黙。

「……………」

さつきよりも重々しくのしかかるそれに思わず話しかけようとして、止まる。

何を考えているんだ、僕は。この紅髪少女は、人様の部屋に堂々と物騒な代物を散開させた上に引つ掛かった奴（僕）を放置し、拳句の果てに三大危険生命体を我が家に呼び込んだ張本人だぞ。

けど。

「…………話してくれないかな？」

けど、彼女をほっとけない僕は、どうやら随分なお人好しなのかもしれない。

「何ができるか分からないけど」

だって、見えちゃったから。

「そんな風に泣かれたら、ほっとけないじゃないか」

頬をつたう、一滴の雫を。

「……………」

しかし、彼女は顔を伏せたまま黙ったままで、一向に話そうとする様子はない。

「言いたくないなら別にいい。けど、これだけは訊かせて欲しい。どうして僕が逃げる必要があるのか、そして……君の言う『あの子』が誰なのか」

何も答えてくれないなら、せめて現状だけは把握しておきたい。すると、彼女は重々しくその口を開き、言葉を紡ぐ。



「あの子　フルフルはね……私の親友なの」

「　え？」

彼女の意外な台詞に思わず素っ頓狂な声をあげる僕。勿論、あの子に名前が某怪物狩りの竜だったことに対する驚きではない。

「はは……っ、そうよね。私みたいな女に親友と呼べる存在がいたことの方がよっぽど驚きかしらね」

自嘲するように小さく笑うアンドロマリウス。真っ赤になって否定することもできたけど、今はそうもしてられないので沈黙を通す。彼女は続ける。

「でも私とあの子は、小さい頃からの親友……ううん、唯一無二と言っても過言ではないわ。……それが仇になるとも知らずにね」

「一体何の　」

そこまで言いかけたところで、僕は自分の浅はかさに気付いた。

悪魔の偽王国。

世界を滅ぼそうとする悪魔とそれを封印する“鍵”たちの戦い。歴史上にこれが起こっていたとしたら、避けて通れない事が一つある。

特別な力を持つ者存在による、力の奪い合い。

人類が今まで何回も起こしたことだ。きっと彼女　アンドロマリウスたちもそんな争いに巻き込まれた者の一人なんだろう。

「悪魔の偽王国このシステムのことを聞いて思わなかった？ 私たち　ソロモン七十二柱は、ただの『道具』よ。“鍵”に利用され、封印されるだけの」

嘲笑しながら言葉を切る。

「……条件が同じ所は前よりはマシだけど、どうしてもこればかりは耐えられないのよ」

自分の手で親友を痛めつけるのは。

震えた声音でそう言ったのを、僕は聞き逃さなかった。

その気持ちは、分かる。僕だって萌や菰と命を賭けて戦えと言われたらとてもじゃないけど精神が保てる気がしない。それを僕達と同



じくらの、しかも女の子が背負った。その重みは察して余りある。

だから。

「僕は逃げて、か」

ぼそりと呟く。

……………うん、覚悟を決めた。

やるべきことは、一つだ。

「ごめん」

僕は、彼女に向かって頭を下げた。

「へ？」

今度は紅髪少女が素っ頓狂な声をあげる番だった。

「僕は君のことを誤解してた。ガサツで自分勝手に、悪魔みたいなヤツだと思ってた」

「……………私、本物の悪魔」

「とにかく！」

僕は身を起こして彼女の方に向き直る。まだお腹の辺りに激痛が走るけど、これくらいなら大丈夫。

「僕は、君と一緒に戦う」

“鍵”としての使命なんてワケの分からないことの為じゃないし。

悪魔の偽王国という、バカげたものの為でもない。  
それはもっと簡単で、強い理由。

「君と、君のたった一人の親友を助ける為に」

そう言っただけ彼女に手を差し伸べた僕は、一体どのように見えるのだろうか。

サタニスト  
人の道を外した悪魔崇拝者？



身の程をわきまえない無謀野郎？

綺麗ごとを言うキザなヤツ？

別に何だっていいや。

「……………」

彼女　アンドロマリウスは、差し伸ばした僕の手をキョトンとした目でしばし見つめた後。

「あんた、バカじゃないの？　人が折角忠告したのに。けどいつも通りの調子でそう言っで。」

「けどそんなバカ、私は嫌いじゃないわ」  
今まで見せたことのない笑顔で僕の手を掴んだ。

被<sup>あいつ</sup>魔師をぶちのめせるなら。



## 自宅にて 五日夜（後書き）

皆さまに重大なお知らせがあります。

今作は、あと二話ほど書いた所で終了します。

ですが代わりに、二作投稿することにしました。

一つは、今作の続編『現代召喚者のススメ？ 変人はアクマを救うモンだぞ』。主役の三人組の中で一番の変人 萌くんを中心とした全体的にコメディにするつもりです。

もう一つは、オリジナル作品『取扱いゴチュウイ！？ その少女は一触即逝いつじょくそくゆきします』。まだまだプロットの段階ですが、コンセプトは『史上最弱のヒロイン』を目指して行こうと思います。

詳しい投稿日時は、後日ということ。



## 戦闘 - 五日夜（前書き）

お久しぶりです。ざっくりと数えて二カ月ぶりになります。学校の文誌やらで進行が遅くなってしまってごめんなさい。でも五つ同時進行は本当にキツイものがあります。もう二度とやりたくないです。



## 戦闘 - 五日夜

「やあ、また会ったね。“鍵”の少年」

町外れの廃工場。

僕　芹達と彼　フランベルとの二度目の出会いの場はそこだった。

「思っていたよりも早い再会で、僕は嬉しいよ」

相変わらずの薄っぺらな笑顔を貼り付けたまま語りかけてくるフランベル。

「本当だったらこっちから君達を招待しようと思っていたのですが

……」

「アテが外れたね」

予想外と言わんばかりの表情のアイツに対して、僕は挑発的な台詞をかける。

しかし、フランベルが纏う雰囲気は別の物を漂わせ。

「そう言うことですか。これで僕は卑怯な手を使わなくてもよくなつたわけですね、ふふふ……」

そして次の瞬間、歓喜に近い高笑いが工場中に響き渡った。やっぱり、もう気付かれてるんだろうか。

僕は込み上げる動揺を押しこめながら、平然を装って訊く。

「何がおかしい？」

「何がって？　もう分かってるくせに」

すると、フランベルは仰いだ顔にこちらに向けた。

そこに不敵な表情を映して。

「その悪魔の能力を使ったね？」

まるで大義名分でもできたと言わんばかりに。

イーヴィル・ジャスティス

《正義の邪眼》



それが彼女　アンドロマリウス……いや、マリーの能力。とても分かりやすく言うと、見たものの『属性』のようなものが見抜くことができるという。仕組みはよく分からないけど、彼女がフランベル達にある『属性』を頼りにここまで案内してくれたから僕は迷わずにここに來たし、フルフルに撃たれても大事には至らずにすんだ。

でも、そのせいで彼女の能力もわれてしまった。けど、僕達も相手の能力の正体は分かっている。

《地這う紫電》  
サンダラス・ロンド

マリーが説明する限りだと、大氣中に存在する電荷を操作して文字通り雷を『這わせ』てくるのだという。だが『這わす』と言っても地面に着いたら意味がないので、自分の周りに電気を溜めて発射させるのが主な攻撃方法らしい。これだけ聞くと遠距離戦にしか強くないイメージがあるが、接近しても溜めた電気がバリアーの役割をするので隙がない、と彼女は言う。

「感謝するよ。これで僕は、君達を遠慮なく叩き潰せる」

徐々に表情が不快なまでに歪むフランベルを見てマリーが呟く。

「あそこまで行くともうダメね……。反吐が出そうなぐらいの被<sup>エクス</sup>シズム主義よ。もう頭の中は悪魔を殺すことしか入ってないわ」

目の前の男からひしひしと伝わる、狂気に満ちた空気が。

本当に今のコイツなら、何の躊躇もなく僕達を殺すかもしれない。そう思えるくらいフランベルの顔は醜惡に染まっていた。

一触即発の空気。

僕はある理由（親父のせい）で他人よりも殺氣じみた雰囲気には慣れてるけど、こんな気分の悪い空気は生まれて初めてのよう気がする。できる事なら今すぐに逃げ出したいなんて思ったのはこれが初めてかもしれない。

逃げるわけにはいかない。  
けど。

「……本当にこんな方法しかないのかな？」



つい本音が零れおちる。

確かに昔はそんな事もあったかもしれない、過去は変えられないかもしれない。けど今は変えられる、わざわざ過去を繰り返す必要なんかどこにもない。

未来は変えることが出来るのだから。

しかし。

「無駄よ」

そんな僕の気持ちをピシヤリと遮るように、マリーは言い放った。  
「相手が好戦的でもしかも戦闘態勢を取った以上、こっちに話を聞く気なんてないわ。そんな相手にそんな事を言っても無駄」

それに、と彼女は言葉を切ると。

「私は、この男を許す気、ないから」

ゾツとするような声と共に、持ってきたトランクから何かを取り出した。

直後に、堅い何かが弾かれるような音が沈黙を切り裂く。……つて鞭！？

「いいねいいねその目だよ！ 僕が求めてたのはその剣<sup>ツルギ</sup>みたいない冷たい目だよ！！ 彼女の言う通り、僕達はやはり戦うべき存在なんだ！ 話し合いなんてムダさ！ こうして君達が来なかったら無理矢理にでもするつもりだったからね」

それを見たフランベルが、今度は恍惚と言わんばかりの表情で僕達を見つめて叫ぶ。

「……………ん？ 今何か変なことを言わなかったか？

「『無理矢理』でも？」

そう言えばさっきも、卑怯な手段とも呟いていた気がしたな。

「ん？ 簡単なことだよ」

その声が聞えたのか、フランベルがあっけらかんとした声音で応える。

「君が僕をブチのめしたくなるような状況を作るんだよ。例えば…



…そうだね、君の幼馴染　ナズナって言ったかな？　あの子にちよつとばかりオイタ（・・・）しちゃうとか。お友達のあの“鍵”の二人を惨たらしいやり方で殺しちゃうのもいいかな？　それから

「もういい」

自分の中の何かが、音を立てて壊れていくのが分かった。

「その減らず口、今すぐ叩けなくしてやる」

それは、理性という名の最後の<sup>たが</sup>罠。

キツと目の前を睨めつける。そこには白い修道服を着た外道しか見えてこない。

親父、ごめん。ちよつとだけ約束を破るよ。

「……………いい目だ」

それを見たフランベルが、恍惚とした声音で呟く。

「……………行くぞ」

「ええ」

その会話が、開幕の合図だった。

＊

「『汝が鍵　フランベル・ロイディツシュの名を以って、汝が鎖を解かん。封印解除“嵐雷の徒は　天地を穿つ”』」

「『汝が鍵　クジライセリの名を以って、汝が鎖を解かん。封印<sup>コンド</sup>解除“正邪の徒は、世界を見抜く”』」

互いに言葉を紡ぎ、赤銅色の指輪が輝かしいまでの光を放つ。それと同時に紅髪の少女は双眸を真紅に染め、黒茶髪の少女の足元に金色の円陣が浮かび上がる。

「『地這う紫電』<sup>サンダラス・ロンド</sup>  
『『正義の邪眼』<sup>イーヴィル・ジャスティス</sup>』」

ここまでは、同時。



「ああっ！」

駆け出す。

先のことなんか何も考えない。自分でも思いつきりと言っている。ほどの力で地面を蹴り上げる。

「ははっ、また雷撃に撃ち抜かれたいのかい？」

しかし、そんな僕の行動を嘲笑うように……いや、嘲笑うフランベルの足元にもフルフルと同じ円陣が浮かび上がり、数本の雷撃の鞭が蛇の如くしなり、うねる。恐らくあれが僕を撃ち抜いたものだろう。確かにここまへ行けば、僕は夕方の二の舞になることは必至だ。そう思った僕の頭に、ここに来る前にマリーの一言が蘇る。

『戦うことになったらやる事は一つよ。アンタがあの被魔師エクソシストに突っ込んで叩く。それだけ』

最初は流石に戸惑った。

『だ〜いじょうぶ、私を信じなさいって』

そんな僕を見た彼女は、悪戯な笑みを浮かべたのをよく覚えている。

『私は、ソロモン七十二柱よ』

「右ッ！」

声が、届いた。

弾かれるように右に飛び退くと、何かが駆け抜けていくのが見えた。

雷撃。

恐らく数瞬間前の僕の心臓を狙って放たれた金色の閃光を眺めていると、フランベルが思わずといった感じの声をあげる。

「……っ！？ 今が見えた（・・・）……だと？」

「下ッ、右ッ、上ッ！」

次々に届く言葉に従って体を翻し、捻り、躲す。そして一刹那後に、彼女の言う通りの場所に閃光が空を裂く。



「アンタの攻撃くらい、私の目で丸わかりよ」  
そして挑発的な一言に、突然フランベルはトーンを落として、  
く。

「……じゃあ、これは避けられるかな？」

すると、奴の周りにある魔法陣から、数十本にも及ぶ雷の蛇がう  
ねり、鎌首をもたげる。

距離は八メートル。

「ここからが本番よ。気を引き締めなさい」

誰のせいで本気になったのかとツツコみたい気持ちを抑え、僕は  
止めていた足を再び駆け出した。

残り七メートル。

「右上下左右下左上右左右上左大きく右に退避！」

舌を噛みそうな台詞を見事に捲し立てて、一気に僕の所に届いて  
くる。僕はそれを一文字も見逃すまいと神経を研ぎ澄まし、迫りく  
る必殺の雷撃を躲し続ける。

六メートル。

ここに来て、アイツの攻撃パターンが読めてきた。基本的には魔  
法陣から生み出した雷の蛇と、少しタメの大きい文字通り稲妻を落  
とす二通りの攻撃しかして来ない。しかも右に右に攻撃するのが彼  
の癖があるようで、三回に一回の割合で右を狙ってきている。どう  
やら心臓を攻撃して一撃で僕達を殺すつもりでいるらしい。本当に  
悪魔と鍵を殺すことしか頭にないみたいだ。

四メートル。

でも僕が一番驚いているのはそこではない。

マリーだ。

何しろずっと僕に指示を飛ばしながら自分の所に来る雷撃を躲し、  
さらに隙あらば鞭で攻撃を加えて牽制までしている。そのお陰で僕  
は、何の躊躇いもなく前に進める……瞬く間に襲いかかってくる閃  
光を避けながら独り言を呟いている僕も僕で凄いと思うけど。

三メートル。



それは僕の中に起こっているとある変化が原因だと思う。

目の前に浮かぶ、赤い文字。そしてそこに踊る、マリーの台詞。

そう、今僕は、他人が話した言葉、音が文字になって目に前に浮かび上がっているのだ。もしかしたら、これが彼女のいう“鍵”の能力なのだろうか？ まあでもこれで僕は、彼女の言葉を聞き逃すことはまずないだろう。

そう思ってた。

あと二メートル　そこで変化が、起きた。

「　　がつ！？」

僕の体に。

不意に腹部に迸る、形容できないほどの激痛。夕方に食らった傷が開いたのだろう。あまりの痛みに思わず腹部を抑えるが、根性で何とかこらえ、走り続ける。時間にして一秒にも満たない。

けど、それが命取りだった。

「……………だりに　　っ」

しまった、聞きのが　　。

反射的に右に身をよじったのと稲妻が落ちてきたのはほぼ同時。

轟音。

「　　っ！　ぐああああっ」

避け損なった左腕の痛みに思わず苦悶の声をあげると、フランベルの顔が不愉快なまで歓喜に満ちた声で笑う。

「ああはははっ。左腕に当たったよ！　さっきの傷が功を奏したみたいだね！」

「……………」

確かに全身に感覚もなくなりそうなくらいの痛みが駆け抜けているし、腕は見るも絶えられないくらい酷い。多分コイツを一発殴つたらもう使い物にならなくなるだろう。

僕は足を止め、ゆっくりと息を整える。



「あまりの痛みでもう諦めたのかな？ 僕的にはもつと痛がつて欲しかったんだけど、別にいいか」

フランベルの言葉に合わせて、足元の魔法陣が輝きを増す。

「……」

やるなら、今だ。

「正面から大きいのが来る！」

マリーの言葉が目の前に映る。そんなことは分かってる。

チャンスは一度きり。

「これで……終わりだ」

フランベルが冷たい声と共に、ゆつくりと右手を下ろす。

「芹いっ！」

マリーの悲痛な叫びを合図に、僕はフランベルの方へと 飛んだ。

『人間が一番油断する時は、攻撃を加えようとする瞬間だ』

いつかは忘れたけど、親父がそんなことを言ってたのを思い出した。まさか一番役に立ちそうもない知識が僕を救うことになるなんて、人生何がためになるか分からないもんだ。

予想もしなかった反撃に、あからさまな焦りを見せるフランベル。その距離は五十センチ、魔法陣にはバリアーどころか一発の紫電を撃つほどの力は溜まってない。

「フルフル？」

すると奴はいきなり声を張り上げて自分の悪魔を呼ぶ。弾かれるように振り返ると、彼女はゆつくりとこっちを向き、雷撃を溜める。ここで撃たれたら、今度こそひとたまりもない。

けど。

「無駄よ」

そんな声と共に、一本の鞭がフルフルの足に絡みつき、体勢を崩す。重心を失った彼女の一撃は僕達を大きく外し、駆けていく。

「ナイスアシスト」



僕は小さく呟くと、再びフランベルの方を睨みつける。

「よう、よくも『俺』の腹に穴あ空けてくれたなあ」

「ひいつ」

顔に恐怖が刻み、堪らず踵を返そうとする奴に。

「……させるか」

全体重をかけてつま先を踏みつける。

バキンッ、と小気味な音を立て、奴の顔が苦痛に歪む。

「左腕だつて痛てえし、ダチや馴染みのことをバカにしてくれたな」

そして激痛が迸る左手で胸倉を掴み、手元に引き寄せ。

「でもな、一番許せねえのは 俺の相棒を泣かせたことだ！」

右手の拳に力がこもり。

「ぶっ飛んで……反省しやがれええええええッ！！」

右手を、全力で、奴の顔のド真ん中を思いつきりブン殴った。



## 戦闘 - 五日夜（後書き）

皆さんスッキリしたところでお知らせがあります。『現代召喚者のススメ』変人はアクマを救うモンだぞ』こと崩くん編をこのページで続けることにしました。なので皆さんこのページをどうか愛用していつて下さい。

あと、新作『取り扱いゴチユウイ！？』その少女は一触即逝します』もよろしくお願いします！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6837/>

---

現代召喚者のススメ ～あの一、アクマ出てきたんですけど～

2010年10月8日12時26分発行